

長岡京左京三条四坊六町跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇一八―四

長岡京左京三条四坊六町跡

2018年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

長岡京左京三条四坊六町跡

2018年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、工場建設に伴う長岡京跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

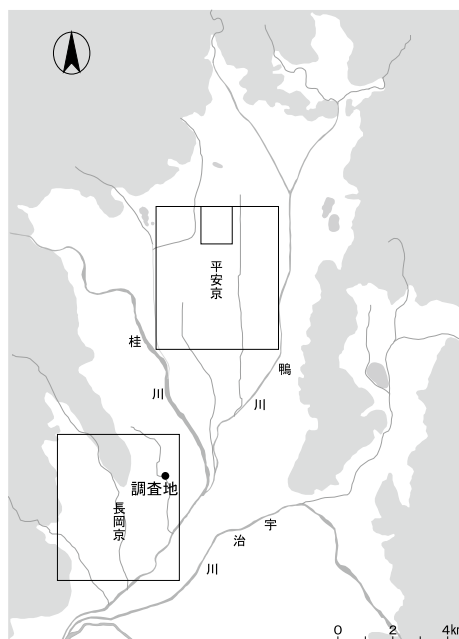
平成30年12月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 長岡京左京三条四坊六町跡（京都市番号 18NG063）
長岡京左京第603次調査（7AN-WGD001）
- 2 調査所在地 京都市伏見区久我西出町8番地18 他
- 3 委 託 者 株式会社メカテック 代表取締役 岩井真一
- 4 調査期間 2018年6月4日～2018年8月10日
- 5 調査面積 1,223㎡
- 6 調査担当者 小檜山一良・木下保明・モンペティ恭代
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「久我」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 小檜山一良
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。
- 15 協 力 者 調査および報告書作成にあたり、龍谷大学の國下多美樹氏よりご教示をいただいた。記して感謝を申し上げます。

(調査地点図)



目 次

1. 調査経過	1
2. 遺 跡	3
(1) 位置と環境	3
(2) 周辺の調査	4
3. 遺 構	5
(1) 基本層序	5
(2) 中世の遺構	6
(3) 長岡京期の遺構	6
(4) 縄文時代から弥生時代の遺構	11
4. 遺 物	14
(1) 遺物の概要	14
(2) 土器類	14
(3) 木製品	16
(4) 金属製品	19
(5) その他の遺物	19
5. ま と め	21

図 版 目 次

図版1	遺構	長岡京期遺構平面図 (1 : 300)
図版2	遺構	弥生時代遺構平面図 (1 : 300)
図版3	遺構	縄文時代遺構平面図 (1 : 300)
図版4	遺構	調査区東壁断面図1 (1 : 50)
図版5	遺構	調査区東壁断面図2 (1 : 50)
図版6	遺構	調査区北壁断面図 (1 : 50)
図版7	遺構	1 1区長岡京期全景 (北から) 2 2区長岡京期全景 (北から)
図版8	遺構	1 建物1 (北から) 2 建物1柱穴22 (東から)

	3	建物1柱穴23 (東から)
	4	建物1柱穴24 (東から)
	5	建物1柱穴72 (東から)
図版9 遺構	1	建物2柱穴76 (北西から)
	2	建物2柱穴81 (北東から)
	3	建物2柱穴85 (東から)
	4	建物2柱穴89 (北東から)
	5	井戸16 (北東から)
図版10 遺構	1	1区弥生時代全景 (北から)
	2	2区湿地83・流路95 (西から)
図版11 遺物		出土土器・木製品

挿 図 目 次

図1	調査位置図 (1 : 2,500)	1
図2	調査区配置図 (1 : 1,000)	2
図3	調査前全景 (北から)	2
図4	調査風景 (北から)	2
図5	周辺調査地点位置図 (1 : 5,000)	3
図6	基本層位図 (1 : 40)	5
図7	建物1実測図 (1 : 80)	7
図8	建物1礎板出土柱穴実測図 (1 : 20)	8
図9	建物2実測図 (1 : 80)	9
図10	建物2礎板出土柱穴実測図 (1 : 20)	10
図11	柱列3実測図 (1 : 80)	11
図12	井戸16実測図 (1 : 50)	12
図13	井戸16木柵隅部分 南東部 (東から)	12
図14	井戸16木柵隅部分 北西部 (東から)	12
図15	溝30～33・79・80断面図 (1 : 40)	13
図16	湿地83・流路95断面図 (1 : 100)	13
図17	縄文時代から弥生時代の土器拓影及び実測図 (1 : 3、1 : 4)	14
図18	長岡京期の土器拓影及び実測図 (1 : 4)	15

図19	木製品実測図1 (1 : 4)	16
図20	木製品実測図2 (1 : 8)	17
図21	木製品実測図3 (1 : 6)	18
図22	金属製品実測図 (1 : 4)	19
図23	縄文時代・弥生時代遺構配置図 (1 : 1,000)	21
図24	長岡京期遺構配置図 (1 : 500)	22

表 目 次

表1	遺構概要表	6
表2	建物柱穴出土礎板一覧表	6
表3	遺物概要表	14
表4	土器一覧表	16
表5	湿地83・流路95堆積土出土樹木の樹種一覧表	19
表6	流路95堆積土出土種実一覧表	20

長岡京左京三条四坊六町跡

1. 調査経過

調査地は、京都市伏見区久我西出町8番地18他に所在する。長岡京の条坊では長岡京左京三条四坊六町に該当する。当地に工場建設が計画され、2013年度に西隣の発掘調査で長岡京期の掘立柱建物跡が良好な状態で検出されていることから、京都市文化市民局文化芸術推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）により発掘調査が必要と判断され、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が調査を行うことになった。長岡京の調査次数は、長岡京左京第603次調査となる。

調査区は、南北58m、東西21mの南北に長い長方形に設定した。掘削土仮置き場の関係により反転調査とした。南側630㎡を1区とし、北側588㎡を2区とした。6月4日に外周フェンスや進入路整備などの準備工を実施した。6月5日から重機で1区の旧耕作土を掘削し、地表下0.75m（標高10.7m）の遺構面で、中世の溝群や長岡京期の柱穴・溝・湿地を検出した。以降、人力で調査を行った。1区の調査終了後に埋め戻し、次いで2区の調査を実施した。

調査の結果、鎌倉時代から室町時代の多数の耕作溝、長岡京期の掘立柱建物2棟・柱列1列・井



図1 調査位置図（1：2,500）

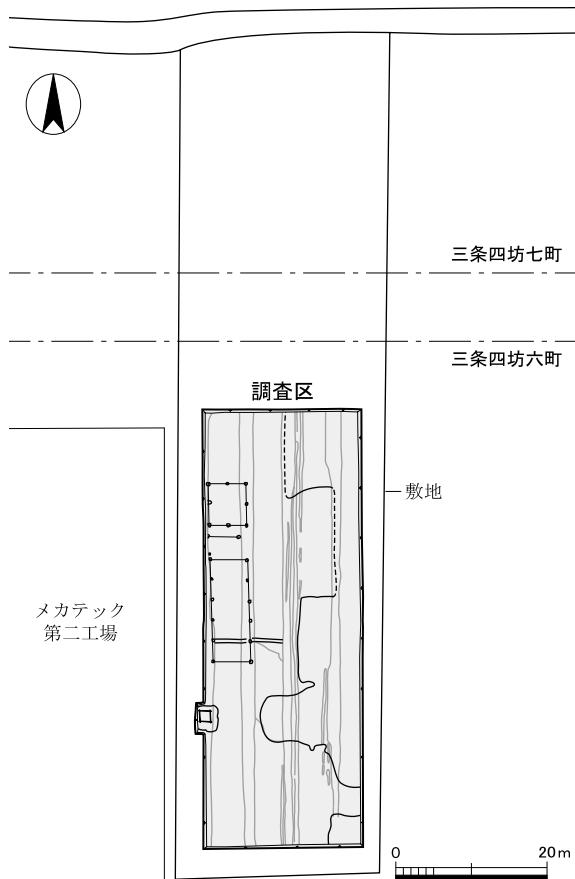


図2 調査区配置図 (1 : 1,000)



図3 調査前全景 (北から)



図4 調査風景 (北から)

戸1基・溝1条・湿地、弥生時代の溝・湿地、縄文時代の流路などを検出した。

なお、調査区は文化財保護課の指導により、井戸16の規模確認の目的で西部を約5m拡張したため、調査面積は1,223㎡となった。

遺構の記録は、随時実測図を作成し、適宜写真撮影を行った。調査中の排土は敷地内に仮置きし、調査終了後に埋め戻した。調査中は適時、文化財保護課の臨検・指導を受け、8月10日に調査を終了した。

註

- 1) 小松武彦・モンベティ恭代『長岡京左京三條四坊六町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013-3 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2013年

2. 遺 跡

(1) 位置と環境

調査地は、京都盆地北半の南西部に位置し、西を向日丘陵、東を桂川に挟まれた低地である。南西約100mには西羽東師川が南流し、東側の桂川右岸から約1km西に位置する。

当地域周辺には長岡京が造営される前の遺跡が点在している。調査地北西約500mには縄文時代から奈良時代の東土川遺跡、北西約600mには弥生時代の集落を中心する鶏冠井遺跡、西約400mには弥生時代中期の集落を中心とする鶏冠井清水遺跡などがある。

延暦3年(784)、桓武天皇によって都が平城京から乙訓の地である長岡に遷都される。当調査地は長岡京の北東部、左京三條四坊六・七町にあたり、調査区を設定した敷地の南半分は六町の北西側に位置する。

長岡京は、延暦13年(794)、廃都され、平安京に遷都される。廃都後の乙訓の地は、平安京と西国を結ぶ交通の要衝として発達し、集落が形成されていく。

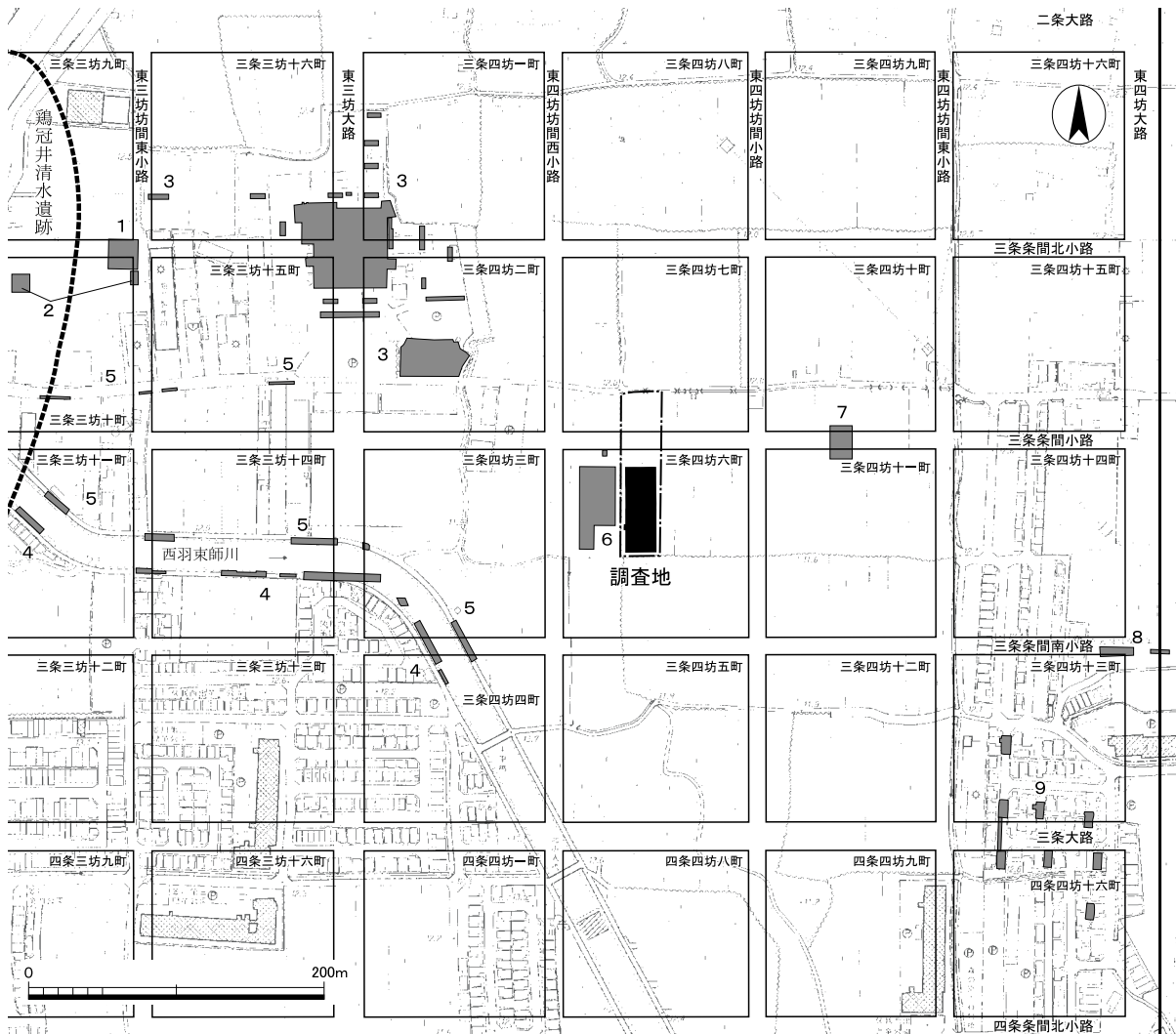


図5 周辺調査地点位置図 (1:5,000)

(2) 周辺の調査 (図5)

調査地は長岡京の北東部に位置し、周辺は水田地帯であったが近年、都市近郊地として工場が誘致され、また宅地開発が増加し、これに伴って発掘調査も多く実施されている。図5に周辺における調査地点を明示した。図中の調査番号は本文中の番号と一致する。

調査1(三条三坊十町)では、長岡京期の東三坊坊間東小路・三条条間北小路などが検出された¹⁾。調査2(三条三坊十町)では、長岡京期の東三坊坊間東小路西側溝などが検出された²⁾。調査3(三条三坊十五・十六町、三条四坊一・二町)では、縄文時代から弥生時代の土器を多量に含む溝・流路、長岡京期の掘立柱建物・柵・東三坊大路などが検出された³⁾。河川改修に伴う調査4(三条三・四坊)では、縄文時代の自然堆積、弥生時代の落込み、長岡京期の掘立柱建物・東三坊大路・三条条間南小路などが検出された⁴⁾。同じく調査5(二・三条三・四坊)では、縄文時代の土坑、弥生時代の溝・土坑状遺構、長岡京期の掘立柱建物・東三坊大路西側溝・三条条間南小路などが検出された⁵⁾。今回調査地の西隣にあたる調査6(三条四坊六町)では、縄文時代の流路、弥生時代の湿地・溝、古墳時代から飛鳥時代の溝、長岡京期の掘立柱建物・柱列・溝などが検出された⁶⁾。調査7(三条四坊十・十一町)では、長岡京期の掘立柱建物・三条条間小路などが検出された⁷⁾。調査8(三条四坊十三町)では、鎌倉時代から室町時代にかけての耕作溝などが検出された⁸⁾。調査9(三条四坊十三町・四条四坊十六町)では、古墳時代の溝、長岡京期の掘立柱建物・柵列・井戸・溝などが検出され、井戸から墨書土器・斎串などが出土した⁹⁾。

註

- 1) 辻 裕司『長岡京左京三条三坊十町跡・鶏冠井清水遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-19 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2013年
- 2) 東 洋一『長岡京左京三条三坊十町跡・鶏冠井清水遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2014-3 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2014年
- 3) 鈴木廣司・長宗繁一「長岡京左京二条三・四坊」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1988年
- 4) 鈴木廣司・長宗繁一「左京三条三・四坊」『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1984年
- 5) 鈴木廣司・長宗繁一「長岡京左京二・三条三・四坊」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1987年
- 6) 小松武彦・モンベティ恭代『長岡京左京三条四坊六町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013-3 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2013年
- 7) 布川豊治『長岡京左京三条四坊十・十一町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-16 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2009年
- 8) 吉村正親『長岡京左京三条四坊十三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-17 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2007年
- 9) 「長岡京左京三条・四条四坊」『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図6)

調査地周辺は全体的にみると北西から南東に緩やかに傾斜しており、周辺は水田と畑の耕作地帯である。当調査地も調査以前は水田として利用されており、標高は11.40m前後である。

西壁 (X=-117,782.50) 地表から約0.7mまでが耕作土層である。1・2層は現耕作土(耕土・床土)、3・4層は標高11.05~11.30mで近世の耕作土、5~7層は標高10.75~11.05mで中世の耕作土である。8層は標高10.75mで暗灰黄色砂泥の地山層となり、この層に切り込んで中世の耕作溝、長岡京期の建物・井戸・溝・湿地などの2時期の遺構を同一面で検出した。

東壁 (X=-117,744) 地表から約0.8mまでが耕作土層である。1・2層は現耕作土(耕土・床土)、3~5層は標高11.0~11.3mで近世の耕作土、6~8層は標高10.6~11.0mで中世の耕作土である。9層は標高10.45~10.6mで長岡京期の黒褐色シルト質粘土が堆積する湿地である。

長岡京期の湿地の下層にあたる10~12層は、標高10.1~10.45mで黒褐色粘土質シルトなどの弥生土器を含む弥生時代の湿地である。さらに下層の13~14層は標高9.1~10.1mで黒褐色腐植土などの縄文時代の流路で、湧水が著しい。15層は標高9.1mで灰白色粘土の地山層となる。

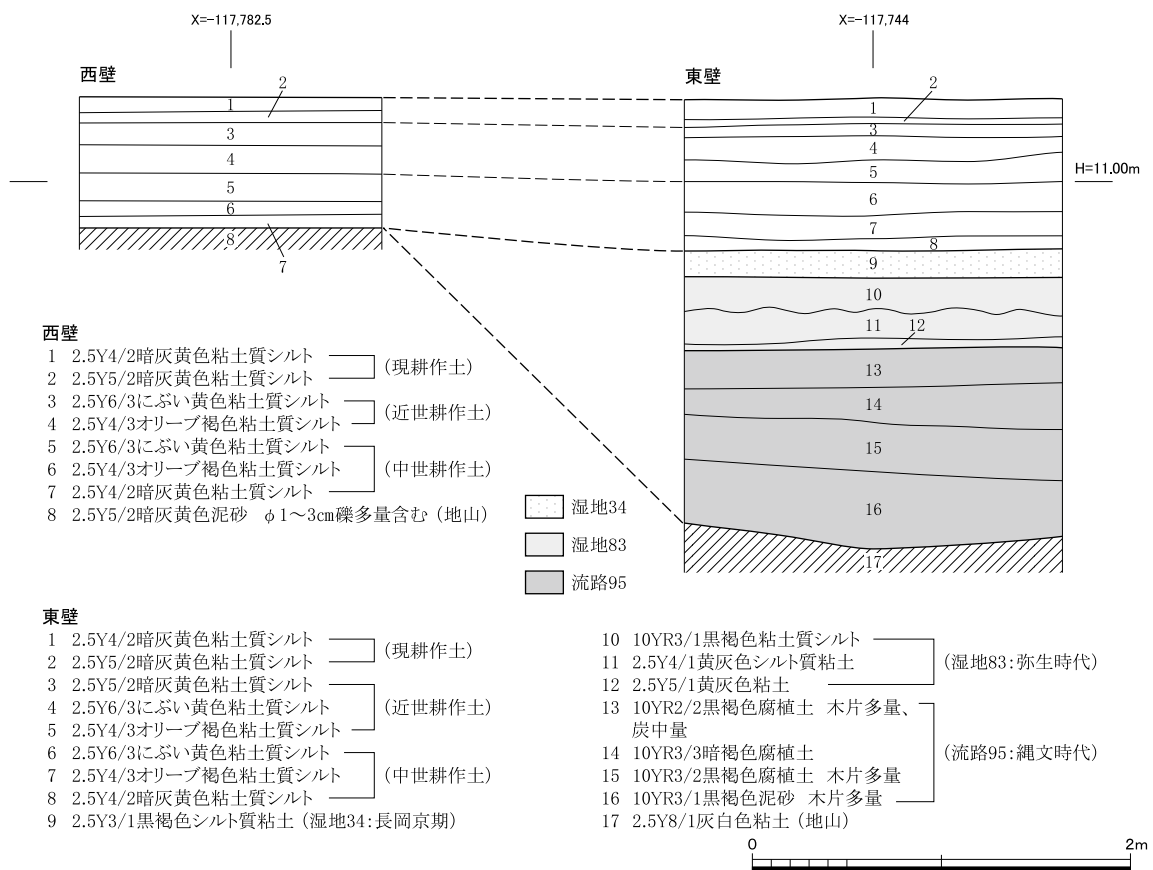


図6 基本層位図 (1:40)

表1 遺構概要表

時代	遺構	備考
縄文時代	流路95	
弥生時代	湿地83、溝30～33・79・80・82	
長岡京期	掘立柱建物1・2、柱列3、井戸16、溝29、湿地34・35	
中世	耕作溝	

(2) 中世の遺構

耕作溝群 検出した溝は23条である。そのうち17条が南北方向の溝であり、東西方向の溝は6条である。大型の溝は、幅1.5～2.1m、深さ0.3～0.4m、断面形は逆台形を呈する。埋土は黄灰色粘土を主体とする。約6m間隔に配される。小型の溝は、幅0.1～0.3m、深さ0.1～0.2mで、断面形はU字形である。埋土は褐灰色粘土を主体とする。溝埋土からは土師器・瓦器・青磁などの鎌倉時代から室町時代の遺物が出土したが、いずれも小片である。南北方向の溝の方位は、いずれもほぼ座標北である。

(3) 長岡京期の遺構 (図版1・7)

建物1 (図7・8、図版8、表2) 調査区の中央西側で検出した東西1間(5.0m)×南北5間(13.5m)の南北棟の掘立柱建物である。建物の方位は、北で1.8度西に振る。南北の柱間は西柱筋で約2.7m等間である。東西の柱間は5.0mである。柱穴の掘形は0.15～0.20mの円形から方形、深さは検出面から0.15～0.20mである。柱穴22～

表2 建物柱穴出土礎板一覧表

遺構名	種類	樹種	備考
建物1 柱穴22	礎板	ヒノキ	図版8-2、木8
建物1 柱穴23	礎板	ヒノキ	図版8-3、木9
建物1 柱穴24	礎板	ヒノキ	図版8-4、木10
建物1 柱穴37	礎板	ヒノキ	
建物1 柱穴72	礎板	ヒノキ	図版8-5
建物2 柱穴42	礎板(大)	ヒノキ	木11
〃	礎板(小)	ヒノキ	
建物2 柱穴76	礎板	ヒノキ	図版9-1
建物2 柱穴81	礎板(大)	ヒノキ	図版9-2、木12
〃	礎板(小)	ヒノキ	図版9-2
建物2 柱穴85	礎板	ヒノキ	図版9-3、木13
建物2 柱穴89	礎板	ヒノキ	図版9-4
建物2 柱穴94	礎板	ヒノキ	

24・37・72の底部には礎板が遺存していた。礎板の樹種は、いずれもヒノキであった。

建物2 (図9・10、図版9、表2) 建物1の北に中軸線を揃えて並ぶ東西2間(5.0m)×南北2間(5.4m)の掘立柱建物である。南北の柱間は約2.7m等間である。東西の柱間は約2.5m等間である。柱穴の掘形は0.25～0.35mの円形から方形、深さは検出面から0.20～0.25mである。柱穴42・76・81・85・89・94の底部には礎板が遺存していた。礎板には柄穴のある建築端材も利用されていた。礎板の樹種は、いずれもヒノキであった。

柱列3 (図11) 建物1と建物2の間に位置す

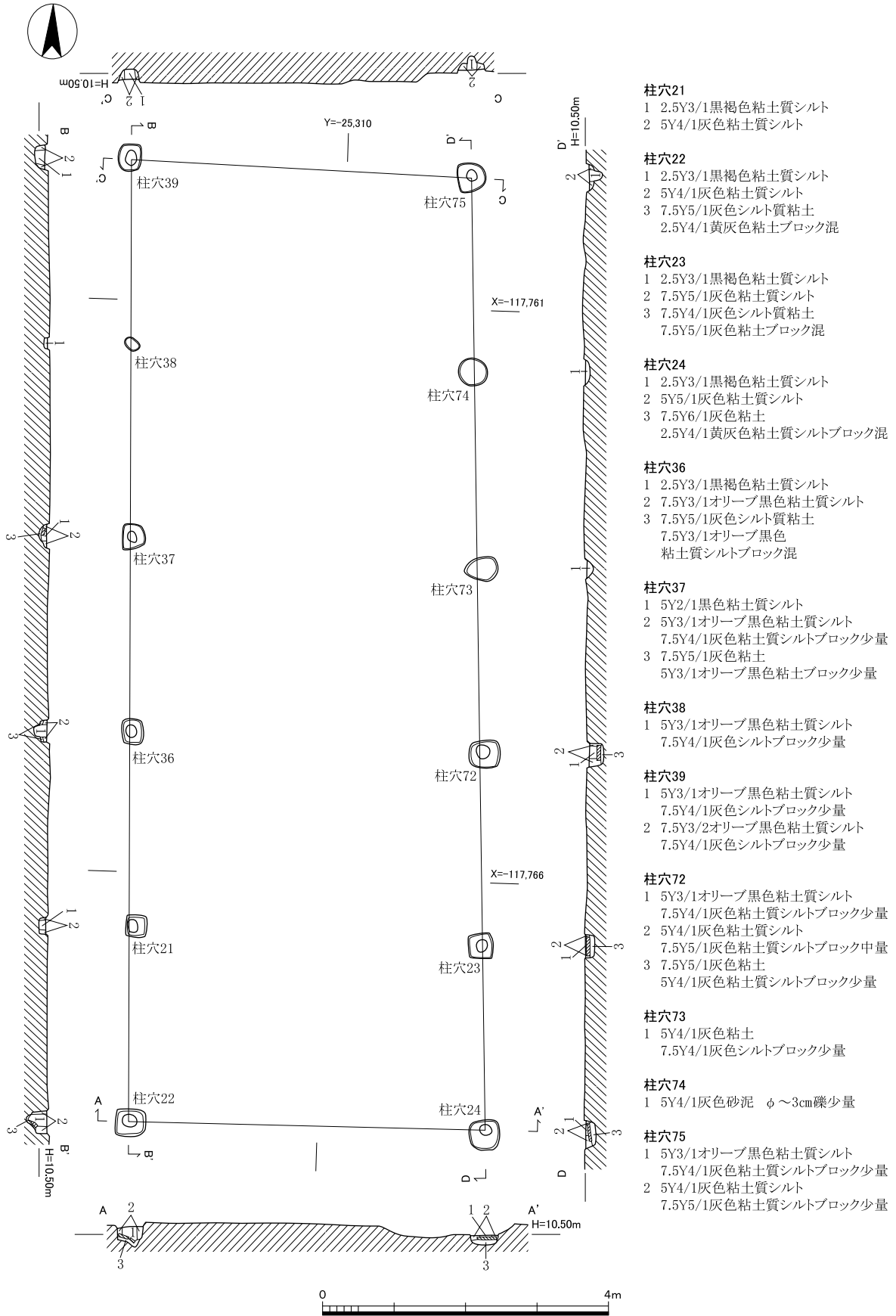
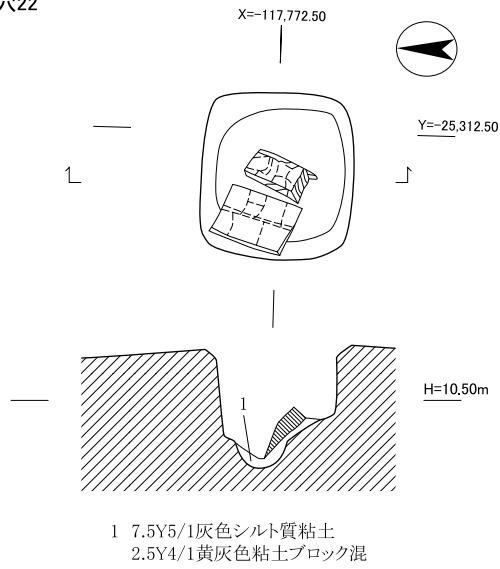
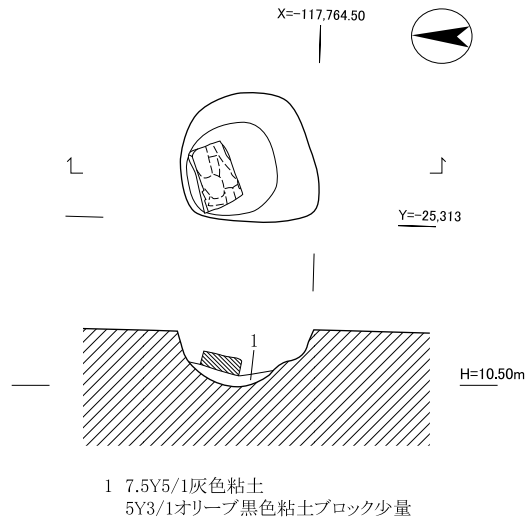


図7 建物1実測図 (1:80)

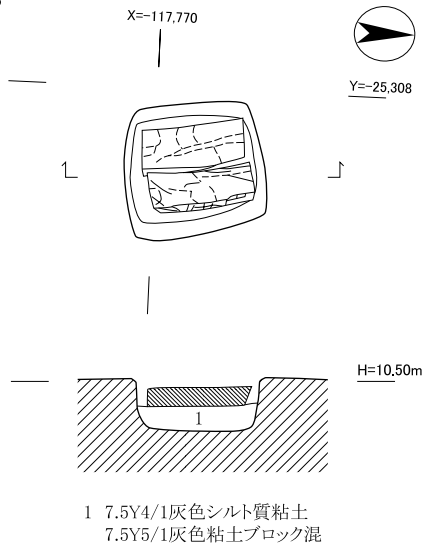
柱穴22



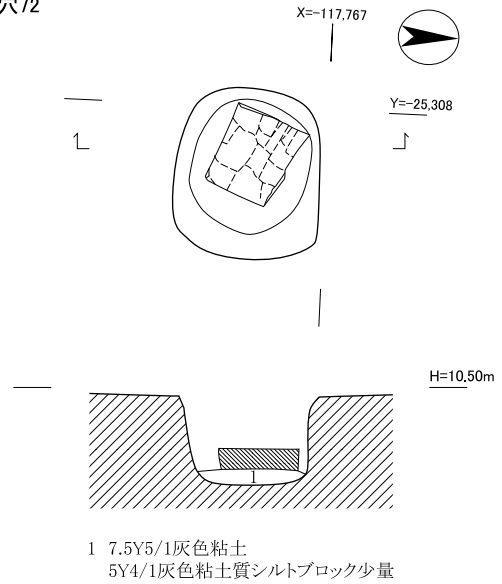
柱穴37



柱穴23



柱穴72



柱穴24

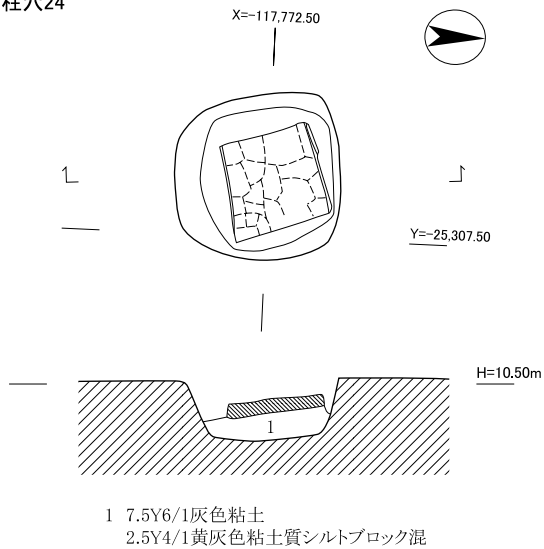
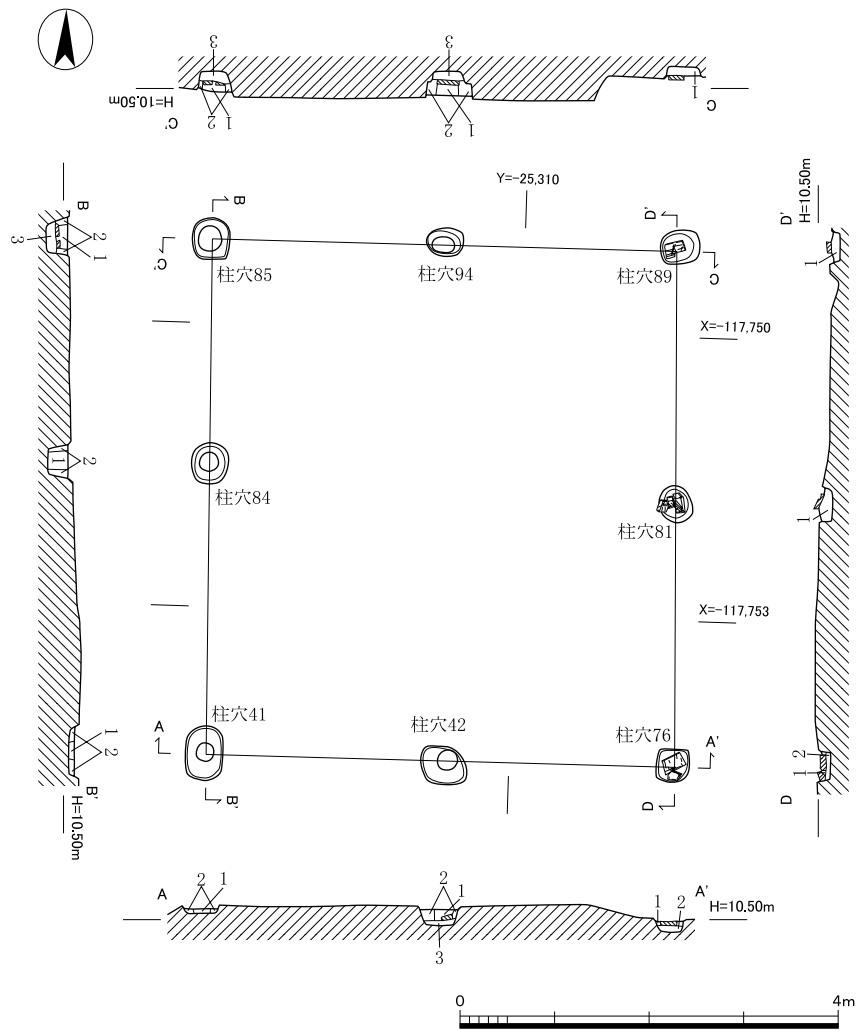


図8 建物1礎板出土柱穴実測図 (1:20)



柱穴41

- 1 5Y3/1オリーブ黒色粘土質シルト
7.5Y4/1灰色シルトブロック少量混
- 2 5Y3/2オリーブ黒色粘土質シルト
7.5Y4/1灰色シルトブロック少量混

柱穴42

- 1 5Y2/1黒色粘土
- 2 5Y3/1オリーブ黒色粘土
- 3 7.5Y4/1灰色粘土質シルト
5Y3/1オリーブ黒色粘土ブロック混

柱穴76

- 1 2.5Y3/1黒褐色粘土
7.5Y4/1灰色シルトブロック少量混
- 2 7.5Y4/1灰色粘土質シルト
2.5Y3/1黒褐色粘土ブロック混

柱穴81

- 1 2.5Y3/1黒褐色粘土 7.5Y4/1
灰色シルト質粘土ブロック多量混

柱穴84

- 1 2.5Y4/1黄灰色粘土
- 2 5Y4/1灰色粘土

柱穴85

- 1 2.5Y3/1黒褐色粘土
- 2 2.5Y3/1黒褐色粘土
7.5Y5/1灰色粘土ブロック少量混
- 3 7.5Y3/1オリーブ黒色粘土
2.5Y3/1黒褐色粘土ブロック少量混

柱穴89

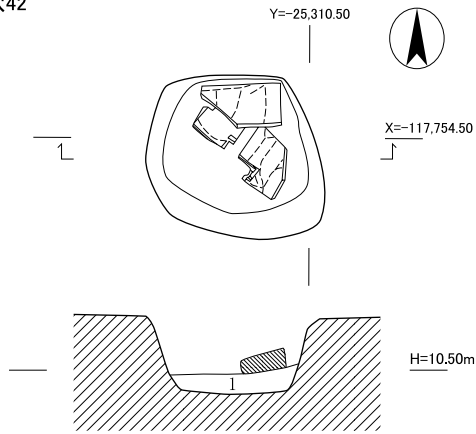
- 1 2.5Y3/1黒褐色粘土
7.5Y4/1灰色粘土ブロック少量混

柱穴94

- 1 2.5Y3/1黒褐色粘土
- 2 2.5Y3/1黒褐色粘土
7.5Y5/1灰色粘土ブロック少量混
- 3 7.5Y3/1オリーブ黒色粘土
2.5Y3/1黒褐色粘土ブロック少量混

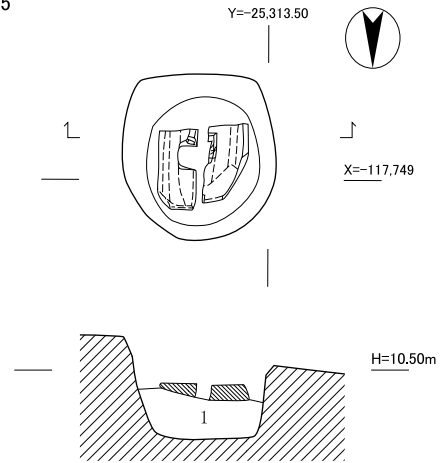
図9 建物2実測図 (1:80)

柱穴42



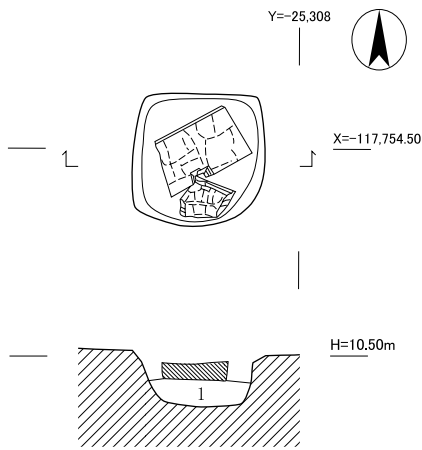
1 7.5Y4/1灰色粘土質シルト
5Y3/1オリーブ黒色粘土ブロック混

柱穴85



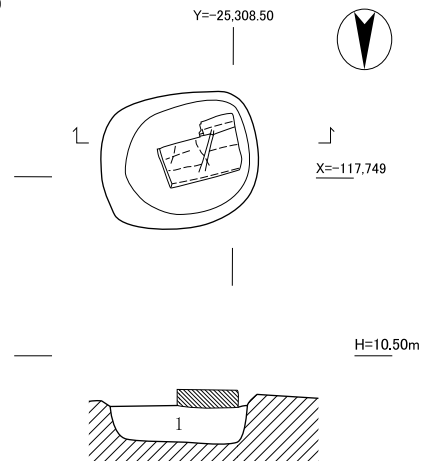
1 7.5Y3/1オリーブ黒色粘土
2.5Y3/1黒褐色粘土ブロック少量

柱穴76



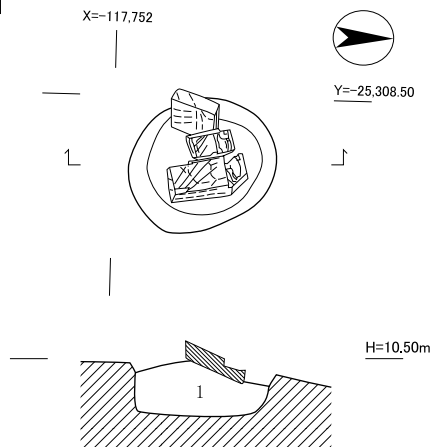
1 7.5Y4/1灰色粘土質シルト
2.5Y3/1黒褐色粘土ブロック混

柱穴89



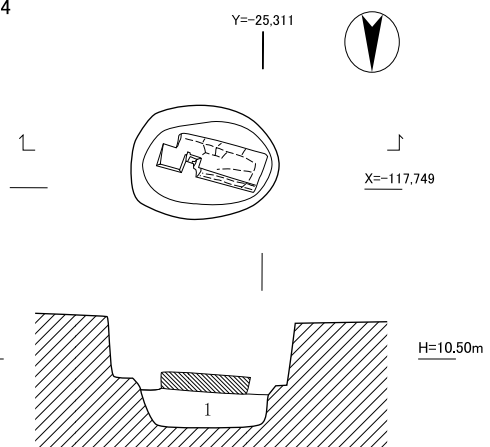
1 2.5Y3/1黒褐色粘土
7.5Y4/1灰色粘土ブロック少量

柱穴81



1 2.5Y3/1黒褐色粘土
7.5Y4/1灰色シルト質粘土ブロック多量

柱穴94



1 7.5Y3/1オリーブ黒色粘土
2.5Y3/1黒褐色粘土ブロック少量



図10 建物2礎板出土柱穴実測図 (1:20)

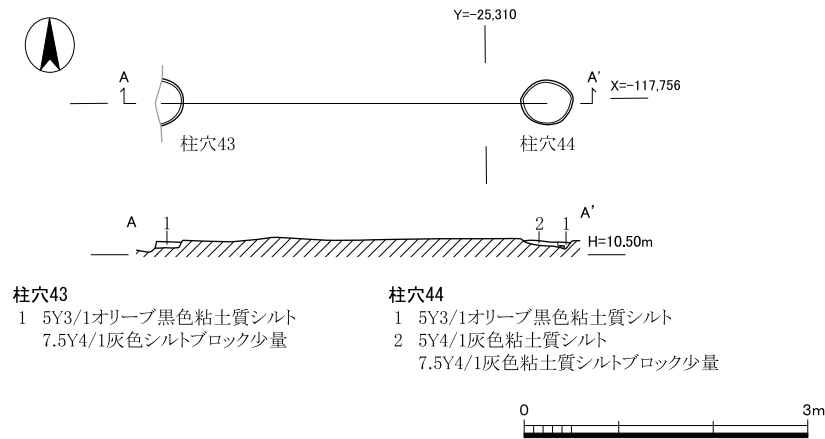


図11 柱列3実測図（1：80）

る東西方向に並ぶ2基の柱穴からなる。柱穴の掘形は径0.6mの円形、深さは検出面から0.1mである。柱間は4.2mで、さらに西に延びる可能性がある。建物1と建物2の間の目隠し塀と考えられる。

井戸16（図12～14、図版9） 調査区の西端南寄りで検出した井戸である。掘形約3.5mの隅丸方形を呈する。底部に一辺1.35mの方形に組んだ木枠が遺存した。各木枠には柄組みの加工は施されておらず、東辺と西辺の木枠の上に北辺と南辺の木枠を重ねており固定はしていない。深さは検出面から0.9m。埋土断面の観察からは、上部の木枠は抜き取られているとみられる。長岡京期の土器類（京都I期中段階）が出土した。

溝29 調査区の中央西側で検出した東西方向の溝である。幅0.4～0.5m、深さ0.3～0.4m。埋土はオリーブ灰色粘質シルト。建物1の柱穴との切り合いは耕作溝のため不明である。

湿地34 調査区の東半に広がる。東西14m以上、南北50m以上、深さ0.1～0.5m。堆積土は黒褐色シルト質粘土である。長岡京期の土器類（京都I期中段階）が出土した。

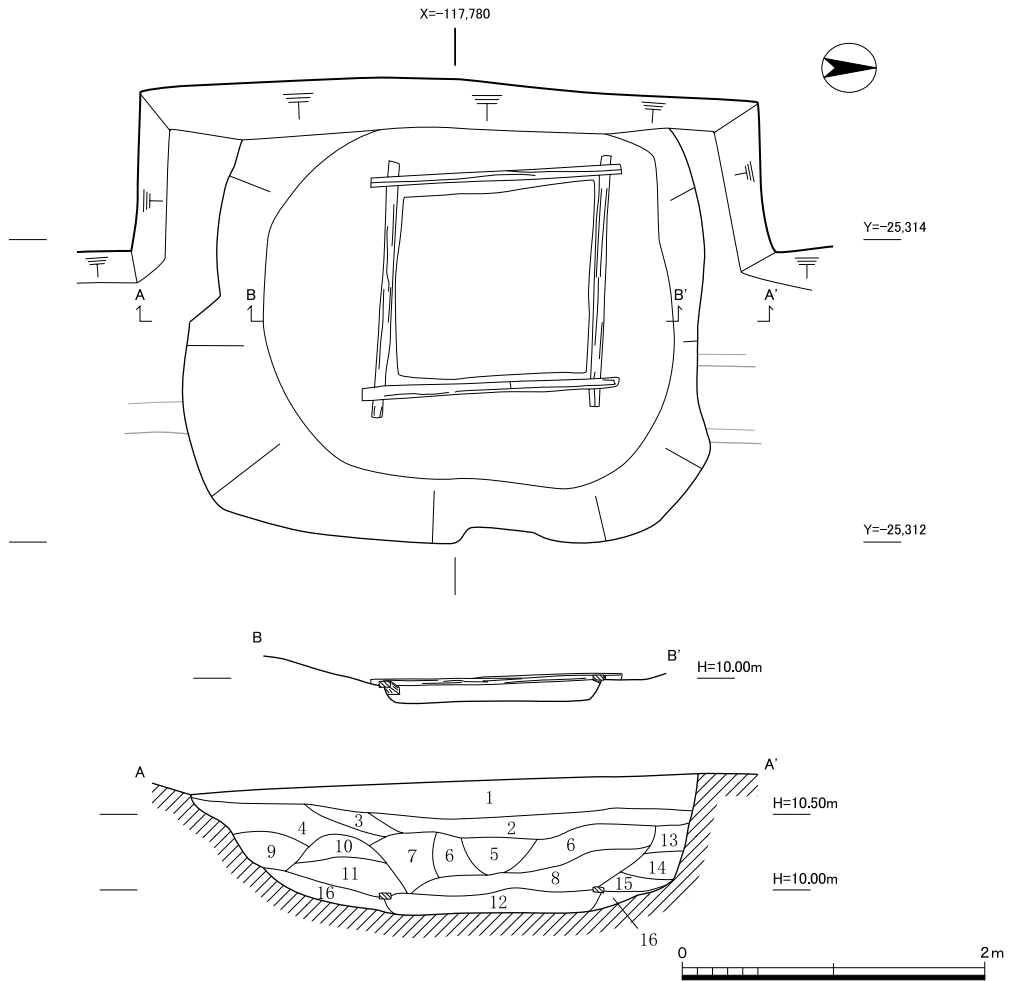
湿地35 調査区の南東隅に位置する。東西4.5m以上、南北4.0m以上、深さ0.1～0.4m。堆積土は黄灰色粘質シルトである。調査区外東側で湿地34とつながる可能性がある。

（4）縄文時代から弥生時代の遺構（図版2・3・10）

溝群（図15） 溝30・79は規模がやや大きく、北西から南東方向の傾きをもつ。幅0.3～1.2m、深さ0.1～0.3m。埋土は黒褐色粘土質シルトを主体とする。溝31～33・80・82は規模が小さく、北東から南西方向の傾きをもつ。幅0.1～0.2m、深さ0.05～0.15m。埋土は黒褐色泥砂や黒色粘土を主体とする。ともに溝底部には凹凸がある。

湿地83（図16、図版10） 調査区の北部に広がる。東西20m以上、南北14m以上、深さ0.3～0.5m。堆積土は大きく3層に分かれ、黒褐色粘土質シルト、黄灰色シルト質粘土、黄灰色粘土などである。樹木が埋没する。縄文土器・弥生土器が出土した。下層に位置する流路95の上層部とみることができる。

流路95（図16、図版10） 湿地83の下層で検出した東西方向の自然流路である。人工的な遺物



- | | |
|--------------------------------------|------------------------------------|
| 1 2.5Y3/1黒褐色粘土 φ5cm以下の礫少量 炭ごく少量 | 8 2.5Y3/1黒褐色粘土 |
| 2 2.5Y2/1黒色～3/1黒褐色粘土 炭ごく少量 | 2.5Y4/1黄灰色～4/2暗灰黄色粗砂混 |
| 2.5Y4/1黄灰色～4/2暗灰黄色シルトブロック一部混 | 9 10YR3/3暗褐色粗砂 |
| 3 2.5Y3/2黒褐色～4/2暗灰黄色泥砂 | 10Y3/1オリーブ黒色～4/1灰色粘土ブロック中量混 |
| 2.5Y3/2黒褐色粘土ブロック混 φ3cm以下の礫少量 | 10 2.5Y4/2暗灰黄色砂 10Y4/1灰色シルトブロック少量混 |
| 4 2.5Y3/1～3/2黒褐色粘土 10Y5/1灰色シルトブロック少量 | 11 10YR4/4褐色砂礫 φ10cm以下の礫 |
| 10YR4/1褐色砂礫混 φ4cm以下の礫 | 12 10Y4/1～5/1灰色粘土質シルト |
| 5 2.5Y3/2黒褐色～4/2暗灰黄色粘土 φ3cm以下の礫少量 | 13 10Y4/1～5/1灰色粘土質シルト |
| 10Y4/1灰色シルトブロック少量 | 2.5Y3/2黒褐色泥砂中量 φ3cm以下の礫少量混 |
| 6 10Y3/1オリーブ黒色粘土 | 14 10Y4/1～5/1灰色シルト やや粘質 |
| 10Y3/1オリーブ黒色～4/1灰色砂混 φ3cm以下の礫少量 | 15 2.5Y4/2暗灰黄色砂礫 φ5cm以下の礫 |
| 7 2.5Y3/1黒褐色粘土 | 16 5Y4/1～5/1灰色+10YR3/4暗褐色砂礫 |
| 10Y3/1オリーブ黒色～4/1灰色砂礫混 φ4cm以下の礫 | φ7cm以下の礫 |

図12 井戸16実測図 (1 : 50)



図13 井戸16木枠隅部分 南東部 (東から)



図14 井戸16木枠隅部分 北西部 (東から)

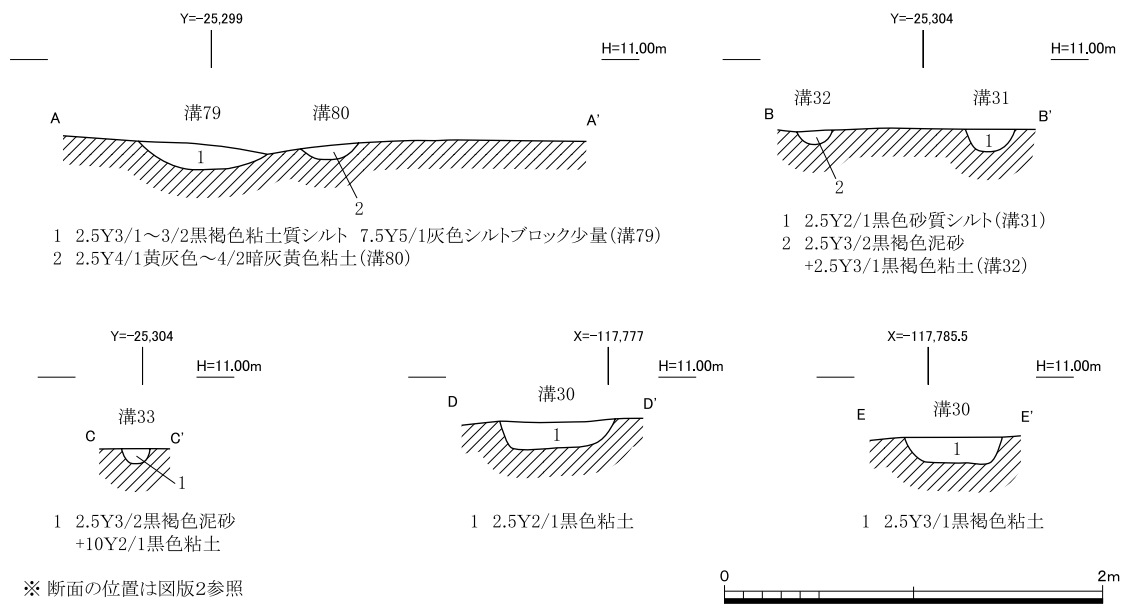


図15 溝30～33・79・80断面図（1：40）

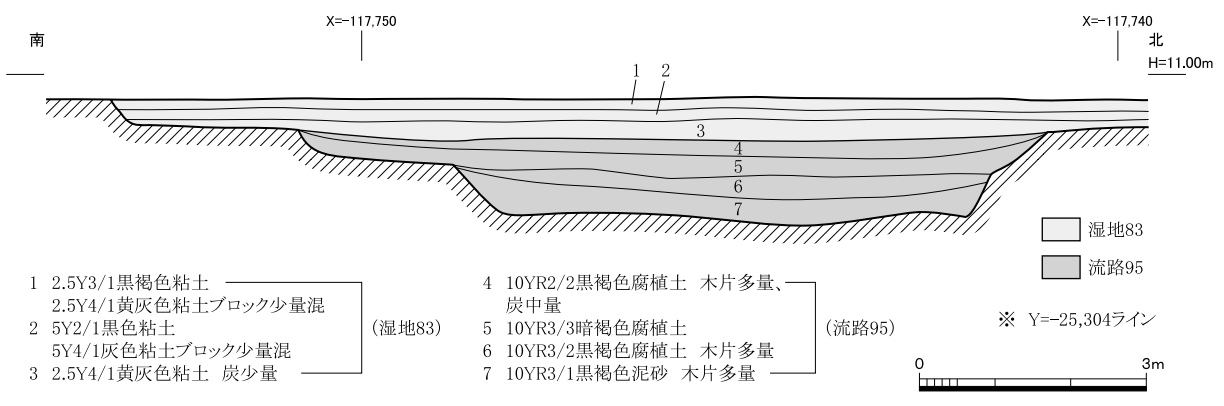


図16 湿地83・流路95断面図（1：100）

が出土しないため、流路の東半部分のみを掘削して調査した。流路の規模は、幅12m以上、深さ0.5～1.1m、東西10m以上である。堆積土は大きく4層に分かれ、黒褐色腐植土、暗褐色腐植土、黒褐色泥砂などである。種実や樹木片が多く、径0.2～0.5mの樹木が埋没する。

註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年。

750頃	840頃	930頃	1010頃	1080～90頃	1180頃	1270頃	1360頃	1440頃	1500頃	1580～90頃	1660頃	1740年代頃	1820年代頃
I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII	XIV
古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中
新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新

4. 遺 物

(1) 遺物の概要

出土遺物は、整理コンテナに29箱出土した。その内訳は、土器類16箱、瓦類1箱、木製品11箱、金属製品1箱である。

土器類では長岡京期のものが大半を占めており、次いで鎌倉時代から室町時代のものがつづく。古墳時代以前の遺物はごく少量である。

瓦類は少量で、丸瓦・平瓦ともに布目・縄タタキの跡がある。木製品には、井戸木杵・柄杓・匙・箸・櫛・建築端材などがある。建築端材は切断されて柱穴底部に礎板として据え付けられる。鉄製品には、体部断面が方形を呈する釘がある。獣骨は、長岡京期の湿地から出土した。

遺物は種類ごとに時代の古い順から記述する。個々の土器類の詳細については表4に掲載した。

(2) 土器類

1) 縄文時代から弥生時代の土器類 (図17、図版11、表4)

湿地83出土土器(1・2) 1は縄文土器深鉢の口縁部である。口縁端部外面の凸帯の下端にキザミ目を施す。色調は灰黄褐色を呈する。胎土は粗く、径3.0mm以下の長石・石英・チャートを多く含む。縄文時代晩期後葉に属する。

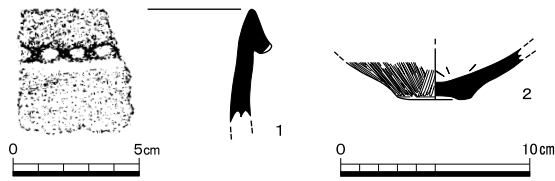


図17 縄文時代から弥生時代の土器拓影及び実測図
(1:3、1:4)

2は弥生土器壺の底部である。底部中央は窪む。体部外面はケズリのちミガキを施す。内面はナデ調整、工具痕が残る。色調は黄灰色を呈する。胎土には径1.5mm以下の長石・石英・チャートを含む。弥生時代後期後半に属する。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
縄文時代	縄文土器		縄文土器1点		
弥生時代	弥生土器		弥生土器1点		
長岡京期	土師器、須恵器、緑釉陶器、黒色土器、瓦、木製品、金属製品		土師器10点、須恵器2点、木製品13点、金属製品1点		
鎌倉時代	土師器、瓦器、輸入磁器				
合計		29箱	28点(6箱)	0箱	23箱

2) 長岡京期の土器類 (図18、図版11、表4)

井戸・柱穴・湿地から京都 I 期中段階の土器が出土している。土師器の椀・皿・杯・高杯・蓋、須恵器の壺・甕がある。

井戸16出土土器(3~10) 3~8は土師器である。3は椀Aである。丸底気味の底部から体部は内湾気味に立ち上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く収める。内面はナデ調整、外面はヘラケズリとナデ調整。4~6は皿Aである。平らな底部から口縁部は内湾気味にのびたのち外傾する。口縁端部は丸く収める。内面はナデ調整、外面はヘラケズリとナデ調整。4の底部外面には「大」の可能性ある墨書がある。7は杯Bの蓋である。やや丸みを帯びた天井部から体部は緩やかに下外方にのびる。端部は丸く収める。外面に丁寧なヘラミガキを施す。内面はヨコナデ調整。摘みは欠損する。8は高杯の杯部である。杯部内面から口縁端部までナデ調整、外面はケズリのち丁寧なミガキを施す。口径32.0cmと大型である。

9・10は須恵器である。9は壺Gである。底部から体部下半が遺存する。底部から体部が直線的に立ち上がる。外面はロクロナデのちナデ調整。内面はロクロナデ、絞り痕が残る。底部外面は糸切未調整。10は甕である。体部上半から口縁部が遺存する。丸みを帯びた体部から頸部は外上方に

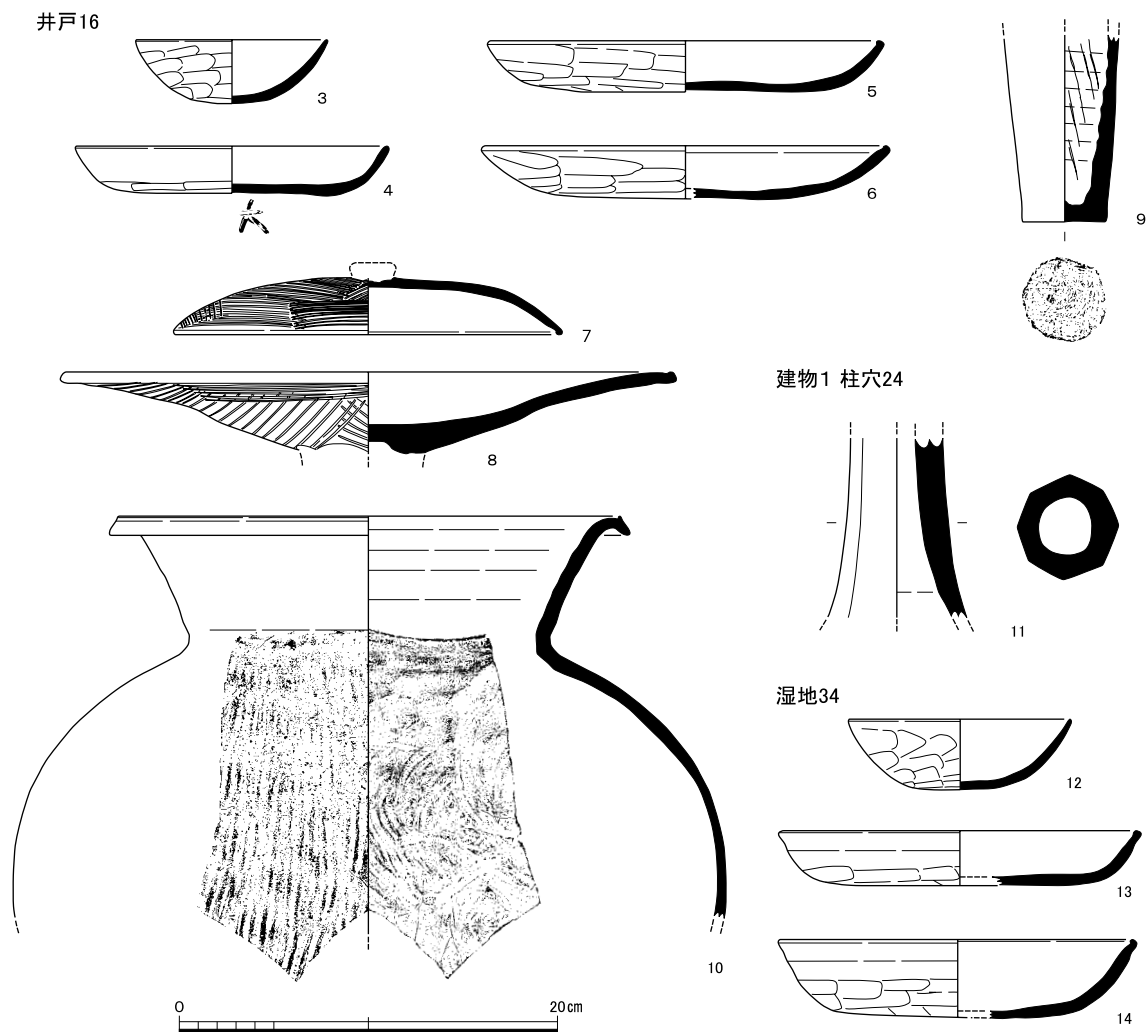


図18 長岡京期の土器拓影及び実測図 (1:4)

表4 土器一覧表

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	備考
1	縄文土器	深鉢	湿地83		(4.5)		10YR6/2	
2	弥生土器	壺	湿地83		(2.7)	4.0	2.5Y6/1	
3	土師器	椀A	井戸16	10.1	3.4		10YR7/2	
4	土師器	皿A	井戸16	16.4	2.6		5YR6/6	底部外面に墨書
5	土師器	皿A	井戸16	20.6	2.7		10YR7/2	
6	土師器	皿A	井戸16	21.2	2.8		5YR7/6	
7	土師器	蓋	井戸16	20.4	(3.2)		10YR7/3	
8	土師器	高杯	井戸16	32.0	(4.3)		7.5YR7/6	
9	須恵器	壺G	井戸16		(9.9)	4.4	N6/0	
10	須恵器	甕	井戸16	26.5	(21.1)		N6/0	
11	土師器	高杯	柱穴24		(9.5)		5YR6/4	
12	土師器	椀A	湿地34	11.7	3.7		2.5YR6/6	
13	土師器	皿A	湿地34	18.6	2.9		10YR8/4	
14	土師器	杯A	湿地34	18.8	4.2		10YR7/2	

※ ()は残存数値

直線的にのびる。口縁端部は外反し、外上方に端面をつくる。頸部内外面はロクロナデ、体部外面はタタキ痕、内面は同心円当て具痕のちナデ調整を施す。胴部最大径約37.7cm。

建物1 柱穴24出土土器(11) 11は土師器高杯の脚部である。断面は8角形に削り出す。内面はナデ調整、裾部はヨコナデを施す。

湿地34出土土器(12~14) 12~14は土師器である。12は椀Aである。丸底気味の底部から体部は内湾気味に立ち上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く収める。内面はナデ調整、外面はヘラケズリとナデ調整。13は皿Aである。平らな底部から口縁部は内湾気味にのびたのち外傾する。口縁端部は丸く収める。内面はナデ調整、外面はヘラケズリとナデ調整。14は杯Aである。平らな底部から口縁部は内湾気味にのびたのち外傾する。口縁端部は丸く収める。内面はナデ調整、外面はヘラケズリとナデ調整。

(3) 木製品 (図19~21、図版11)

木製品には、匙・柄・柄杓・箸・櫛・井戸木杵・建築部材片がある。

木1は匙である。やや平坦な小皿状の頭部と円柱状の柄からなる匙である。頭部の幅3.0cm、柄の径1.4~1.2cm、長さ21.6cm以上。材質はスギである。湿地34から出土した。

木2は刃物の柄である。断面形が長円形を呈する柄の中に金属刃の茎部分が遺存する。柄は長さ8.3cm、径は1.3~2.8cm。材質はバラ科である。井戸16から出土した。

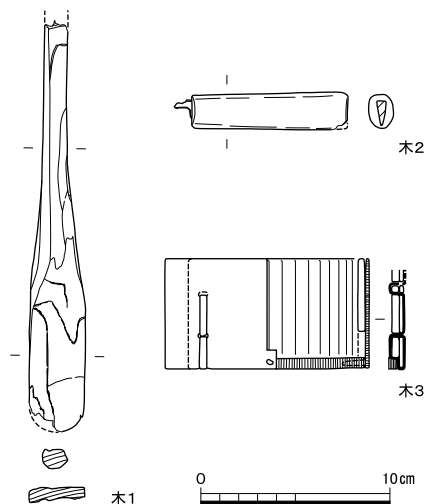


図19 木製品実測図1 (1:4)

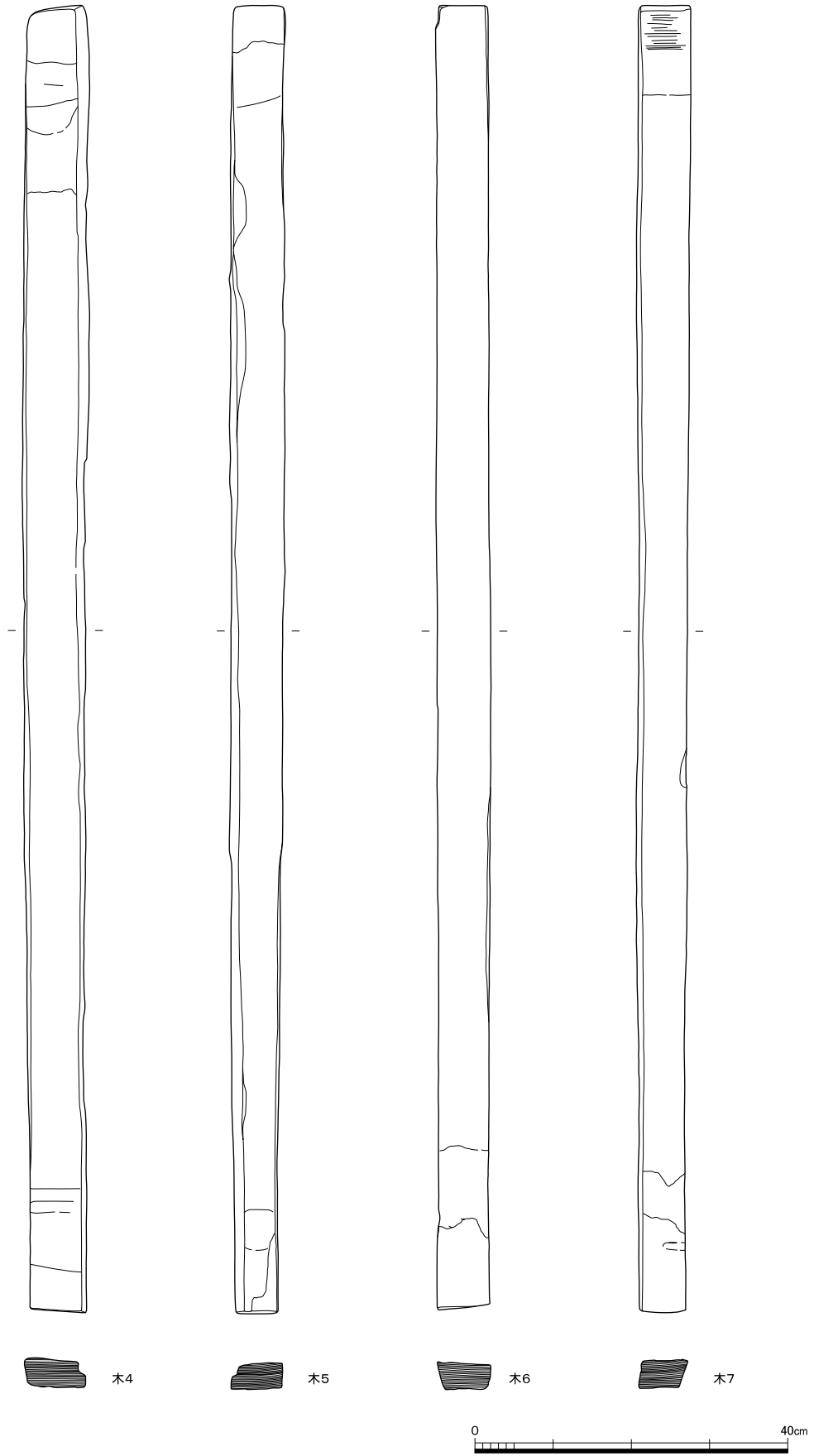
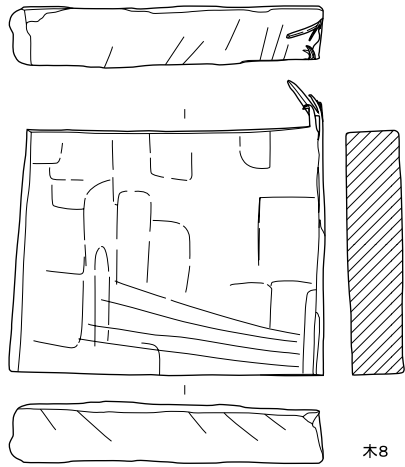
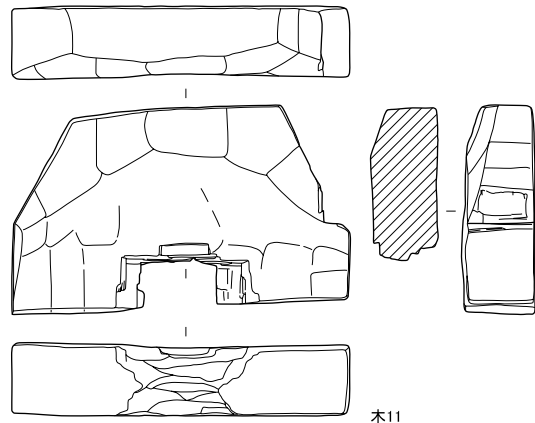


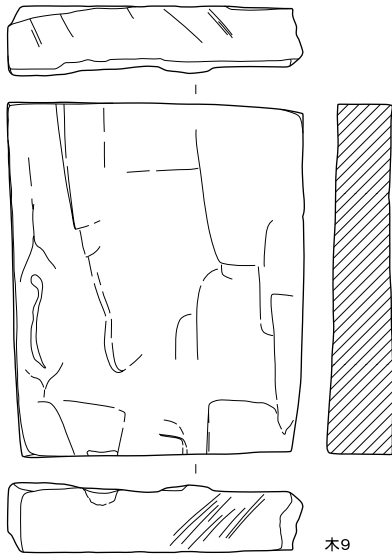
图20 木製品実測図2 (1 : 8)



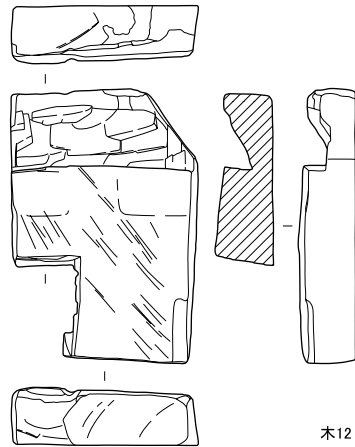
木8



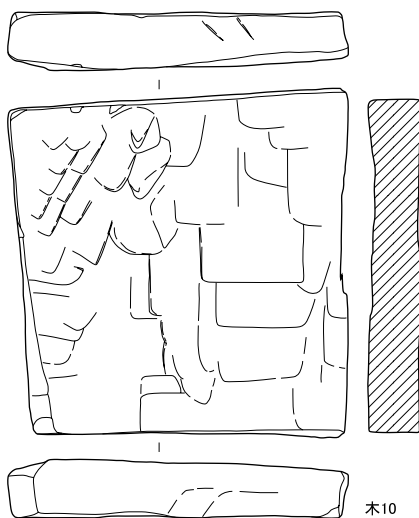
木11



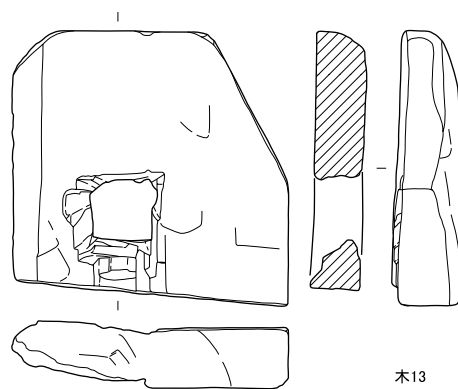
木9



木12



木10



木13



图21 木製品実測图3 (1:6)

木3は柄杓である。掬部の底板は円盤状で径10.4cm、厚さ0.6cm。側部は曲物で高さ5.8cm、厚さ0.2cm。0.7～0.8cm幅で木目に直交して切り込みを入れて円形に曲げ、桜の皮で綴じる。底板と側部は木釘でとめる。材質はともにヒノキである。井戸16から出土した。

木4～7は井戸枿材に転用された建築部材である。幅6.8～8.4m、厚さ3.7～3.8m、長さ1.67～1.72m。木4は南面、木5は東面、木6は西面、木7は北面に据え付ける。各材に柄穴は施されていない。井戸16から出土した。材質はともにスギである。

木8～13は礎板の建築端材である。

木8～10は方形の板材である。厚さは3.9～5.1cm。木8は建物1の柱穴22、木9は建物1の柱穴23、木10は建物1の柱穴24から出土した。材質はともにヒノキである。

木11～13には柄穴がある。厚さは4.1～5.8cm。木11は建物2の柱穴42、木12は建物2の柱穴81、木13は建物2の柱穴85から出土した。材質はともにヒノキである。

(4) 金属製品 (図22)

金属製品には釘がある。複数出土しているが、状態の良好な個体を図化した。

金1は釘である。頭部は方形で、体部の断面形も方形である。長さ7.1cm。長岡京期の井戸16から出土した。

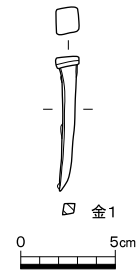


図22 金属製品
実測図 (1 : 4)

(5) その他の遺物

その他の遺物には、獣骨・自然遺物がある。

獣骨には牛馬の寛骨などがある。特徴的な部位が欠損しているために牛馬の特定できない。長岡京期の湿地34から出土した。

自然遺物には植物種実・樹木がある。

樹木の種類には、ムクノキ・アカガシ亜属・クスノキ科・サクラ属・クワ科・アカシデなどがある。湿地83、流路95堆積土から出土した。出土した樹木は、図版2・3に検出地点を一部明示し、樹種を表5に示した。

流路95堆積土から出土した種実は、表6に示した。これらの種類には、木本のクワ・ブナ・マタタビ・ツバキ・バラ・ミカン・ブドウ・ウコギ、草本のイラクサ・タデ・スベリヒユ・アブラナ・スミレ・セリ・ナス・キク・ユキノシタなど多くの種類がある。部位は果実、幼果、種子、核がある。これらの生育環境は、木本はほとんどが山野、山地である。一方の草本は山野、野原、道端などがあるが、水辺、湿地で生育する種類も多いのが特徴である。

表5 湿地83・流路95堆積土出土
樹木の樹種一覧表

番号	樹種
樹木1	ムクノキ
樹木2	アカガシ亜属
樹木3	クスノキ科
樹木4	アカガシ亜属
樹木5	アカガシ亜属
樹木6	サクラ属
樹木7	サクラ属
樹木8	アカガシ亜属
樹木9	クワ科
樹木10	アカガシ亜属
樹木11	アカシデ

表6 流路95堆積土出土種実一覧表

	和名	部位	科名	生育環境	上層	下層
木本	クワ属	果実	クワ	山地・庭木・栽培	41	3
	コウゾ属	果実	クワ	山野・庭木・栽培	19	6
	アカガシ亜属	果実・幼果	ブナ	山地	28	7
	マタタビ	種子	マタタビ	山野	1	2
	サルナシ	種子	マタタビ	山野	2	3
	サカキ	種子	ツバキ	庭木・山地	5	
	キイチゴ属	核	バラ		7	1
	フユイチゴ	核	バラ	山地	12	3
	サンショウ	核	ミカン	山野		1
	カラスザンショウ	核	ミカン	山野	4	4
	ブドウ属	種子	ブドウ	山野		2
	タラノキ	種子	ウコギ	山野	13	3
	エゴノキ	核	エゴノキ	山地・野原		2
	ムラサキシキブ属	核	クマツヅラ	山野・庭木	7	2
	ニワトコ	核	スイカズラ	山野・庭木	2	
	クロガネモチ	核	モチノキ	山野		2
	クマシデ属	果実	カバノキ	山野		1
草本	イラクサ科	種子	イラクサ		54	
	タデ科 (三稜形)	果実	タデ	水辺・湿地・道端	60	22
	タデ科 (扁平形)	果実	タデ	水辺・湿地・道端		3
	スベリヒユ	種子	スベリヒユ	畑・道端		1
	アブラナ科	種子	アブラナ	水田・水辺・道端	3	4
	スマレ属	種子	スマレ	道端・山野	19	10
	オトギリソウ属	種子	オトギリソウ	湿地		1
	セリ科	果実	セリ	湿地・山野		3
	チドメグサ属	果実	セリ	道端・庭・野原	54	4
	ナス科	種子	ナス	山野・道端・栽培	2	
	キク科	果実	キク	野原・湿地	1	1
	イグサ属	種子	イグサ	湿地・山野	3	
	ネコノメソウ属	種子	ユキノシタ	山野	318	91

※ サンプル量 上層:664 g、下層:451 g

5. ま と め

今回の調査では、長岡京期の建物や湿地を検出した。また、それらに先行する遺構群を検出したことにより長岡京が造営される前の環境や土地利用についての資料を得ることができた。

縄文時代から弥生時代（図23）西から東方向の自然流路95がある。今回は自然遺物以外の出土はないが、流れの方向や規模から西隣りの2013年度調査で検出している流路の延長部であることは明白で、縄文時代の遺構である。

湿地83は流路95の上部に位置しており、流路埋没後の窪みが湿地となったもので、堆積土からは縄文土器・弥生土器が出土している。当地は長岡京が造営される前から、湿地状の地形が広がっていたことがわかった。前回調査ではイネ属由来の植物珪酸体が検出されており、この湿地を利用した稲作が行われていたとみられる。

湿地83に切り込んだ溝79は、北西から南西方向の傾きをもち、溝30も同様の規模と傾きである。遺物は出土しなかったが、流れの方向や規模から前回調査の弥生時代の溝の延長部と考えられる。また、溝31～33・80・82などの遺構も検出したことにより、当地の土地利用の一端がわかった。

長岡京期（図24）建物・井戸・溝・湿地などがある。建物1と建物2は、規模や構造が異なるが建物の南北の中心軸を揃えて南北に並んでおり、規格性が高い。北側の建物2は、弥生時代の湿地83を整地して建てていることがわかった。建物1・2とともに地盤が不安定なために、柱穴底部に建築端材を利用した礎板を据える。建物1は東西の柱間が5.0mあり、建物の構造は不明であるが、周辺では牛馬の足跡が検出されており、厩舎などの可能性も考えられる。東西方向の柱列3は建物1と建物2の間に位置することから、目隠し塀の性格をもつとみられる。井戸16は木枠組み一辺1.35mの大型で、長岡京内での検出例からみても有数の大きさである。

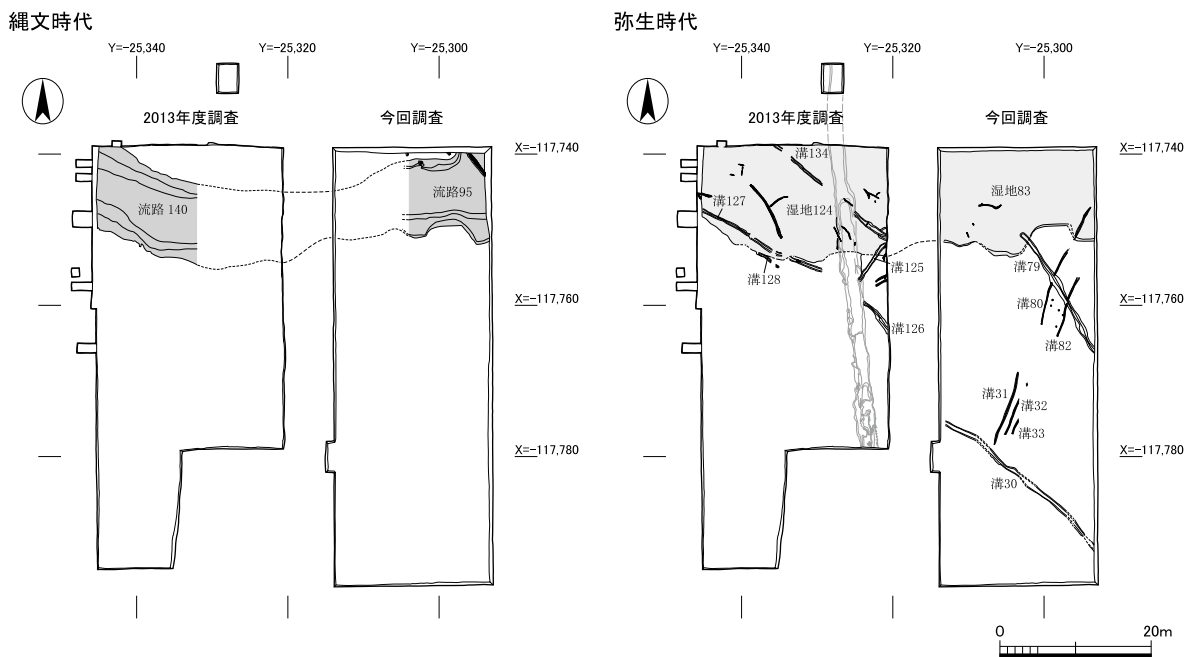


図23 縄文時代・弥生時代遺構配置図（1：1,000）

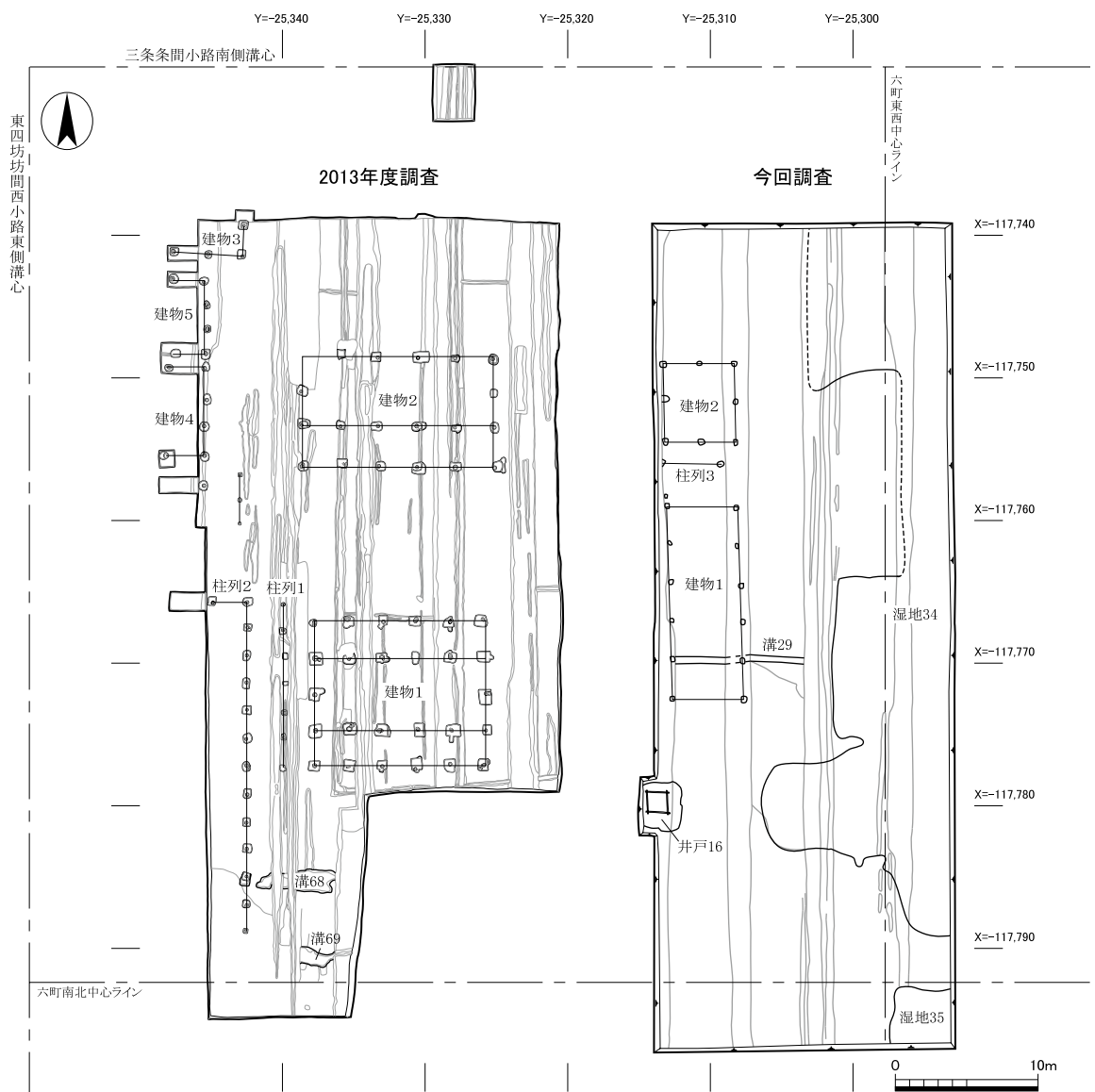


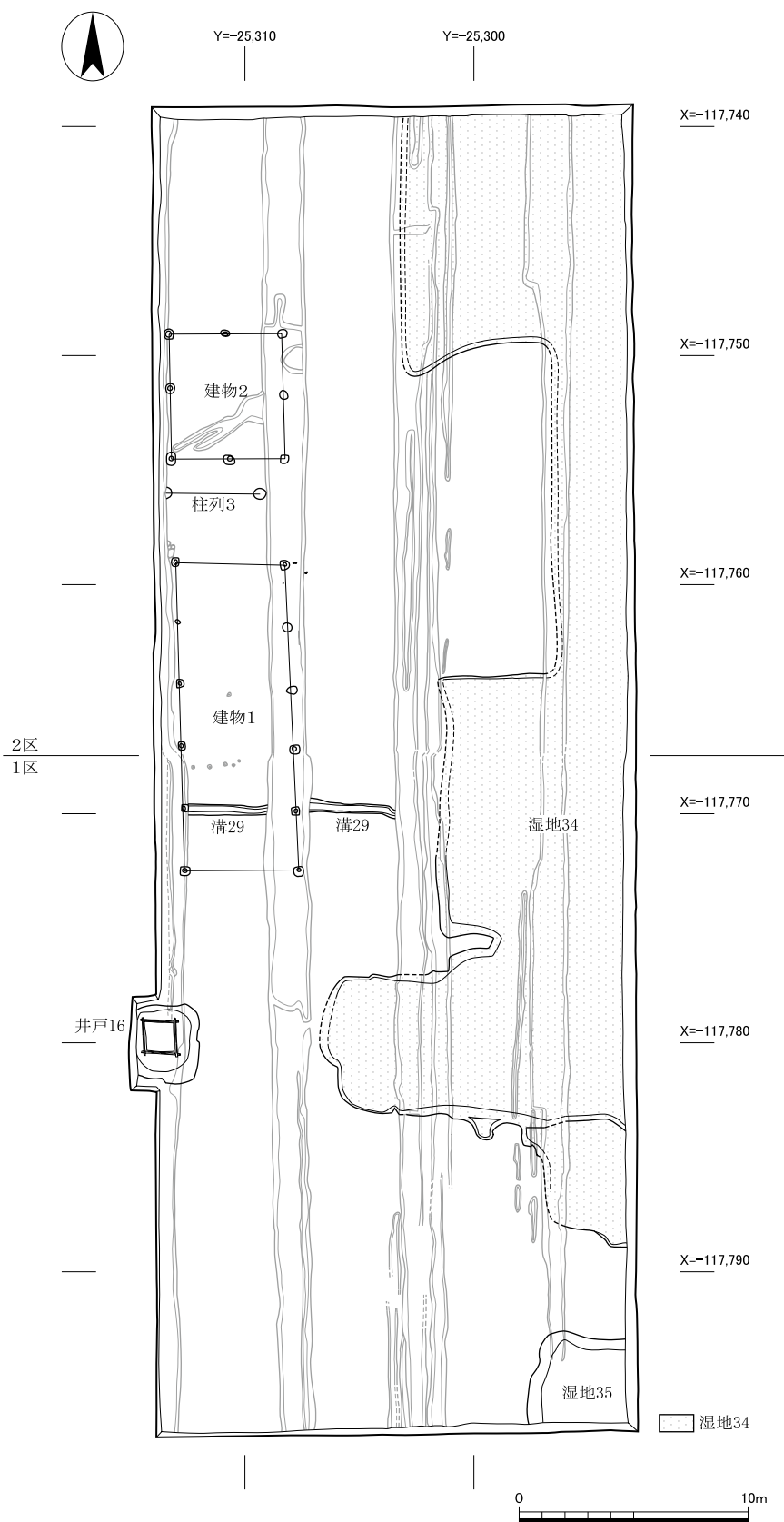
図24 長岡京期遺構配置図 (1 : 500)

湿地34は、調査区東半部にひろがり、湿地西端が六町の東西中心付近にあたることから、当地の左京三条四坊六町東半部は長岡京造営後も湿地の状態であったことがわかる。

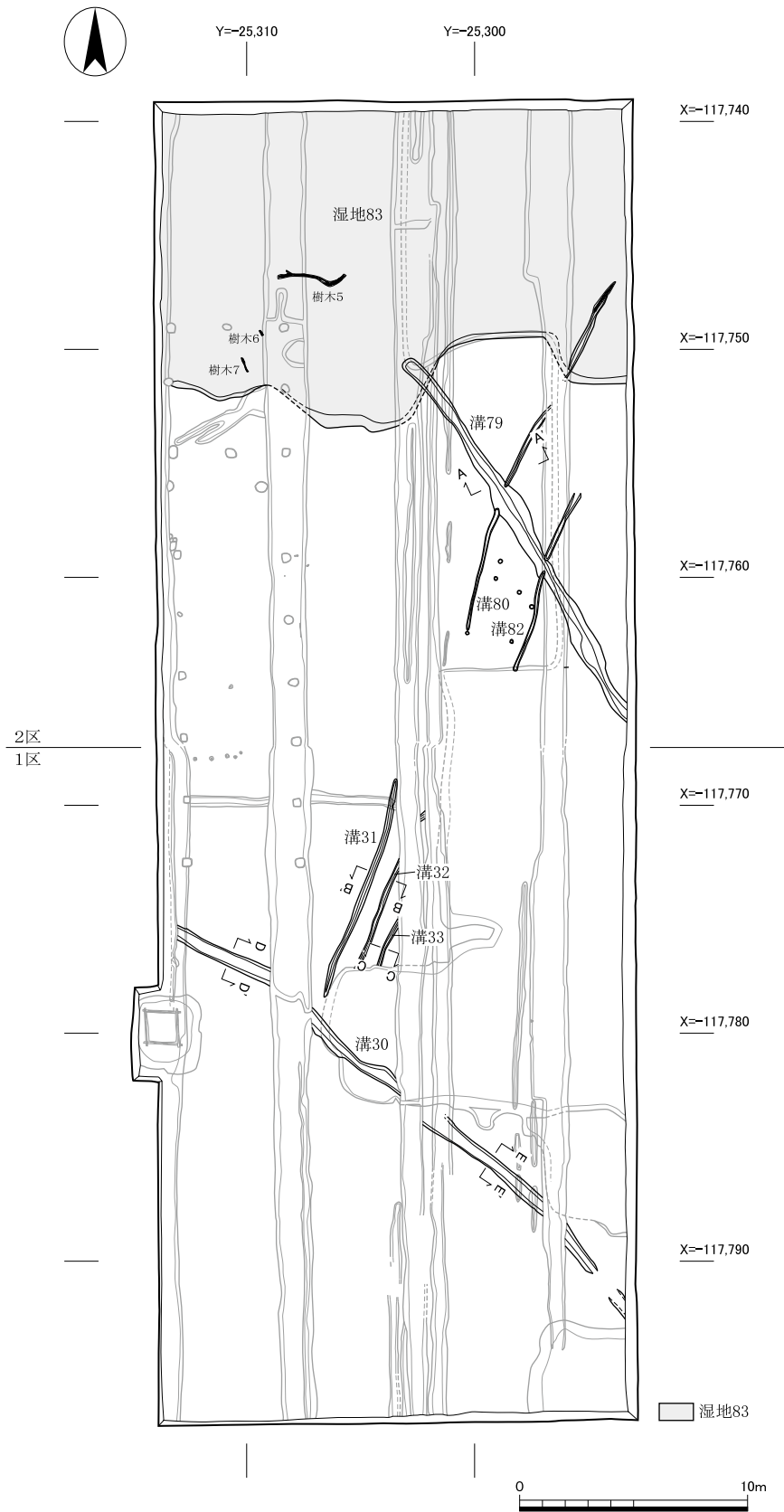
前回調査では、六町の西側に位置する地点で、主屋とされる建物1とその北側に建物2が南北に並んでいた。さらに、北西側には倉庫などの雑舎とみられる小規模建物が3棟建ち並ぶ遺構配置が復元されていた。さらに建物1の南方には東西方向の2条の溝による小径と考えられる通路を検出していたが、今回は小径の延長部を検出できなかった。さらに調査区南側では当該期の遺構もなかったことから、南側に遺構の展開の可能性は低いとみられる。これらの建物配置などを考慮すれば、この宅地の規模は六町の北西部1/4町の広さをもつと考えられ、長岡京の中規模宅地の典型を示すものといえよう。

鎌倉時代から室町時代 南北方向の多数の耕作溝がある。当地は平安時代以降、耕作地として土地利用され、現在まで継続していたことが窺える。

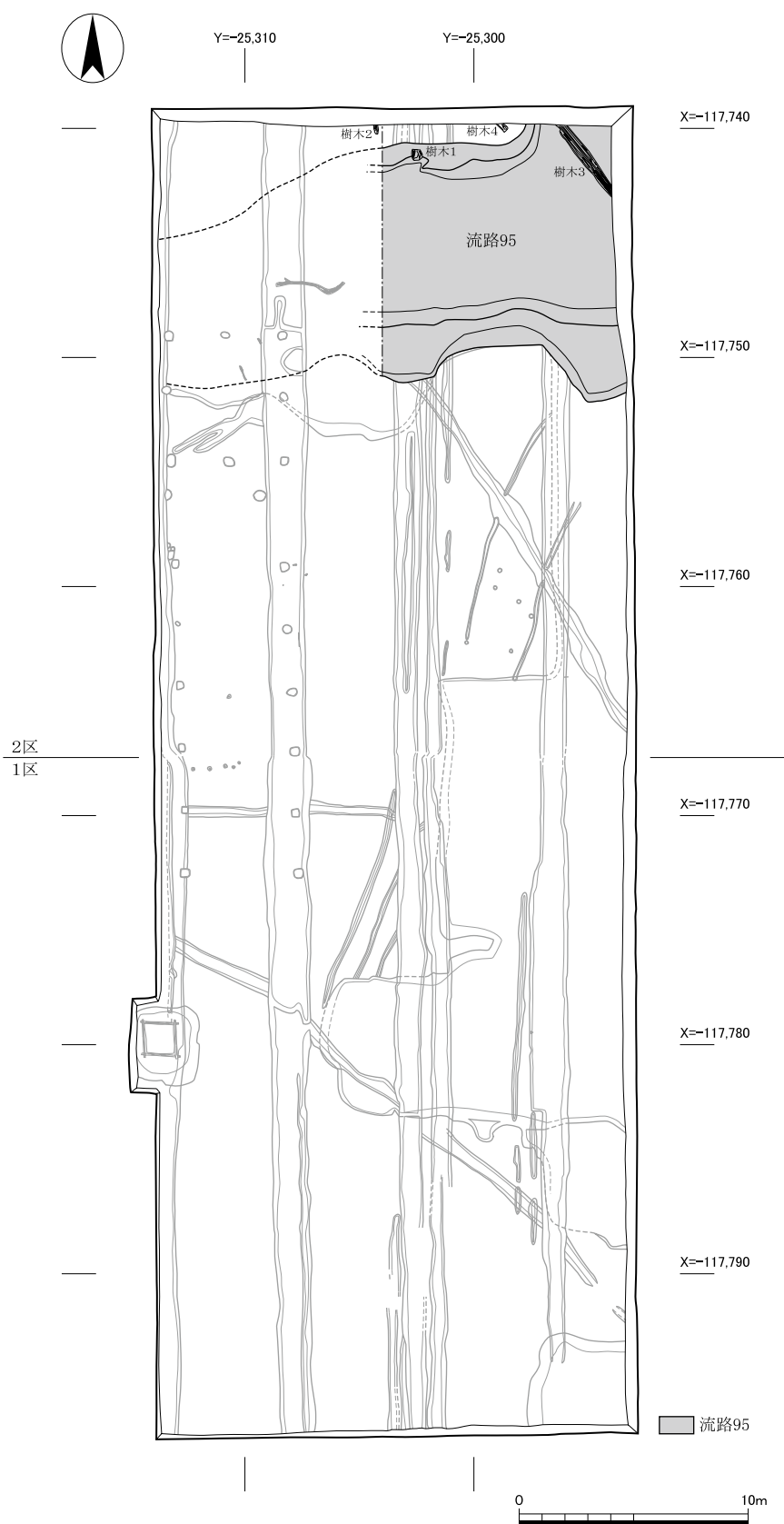
圖 版



長岡京期遺構平面図 (1 : 300)

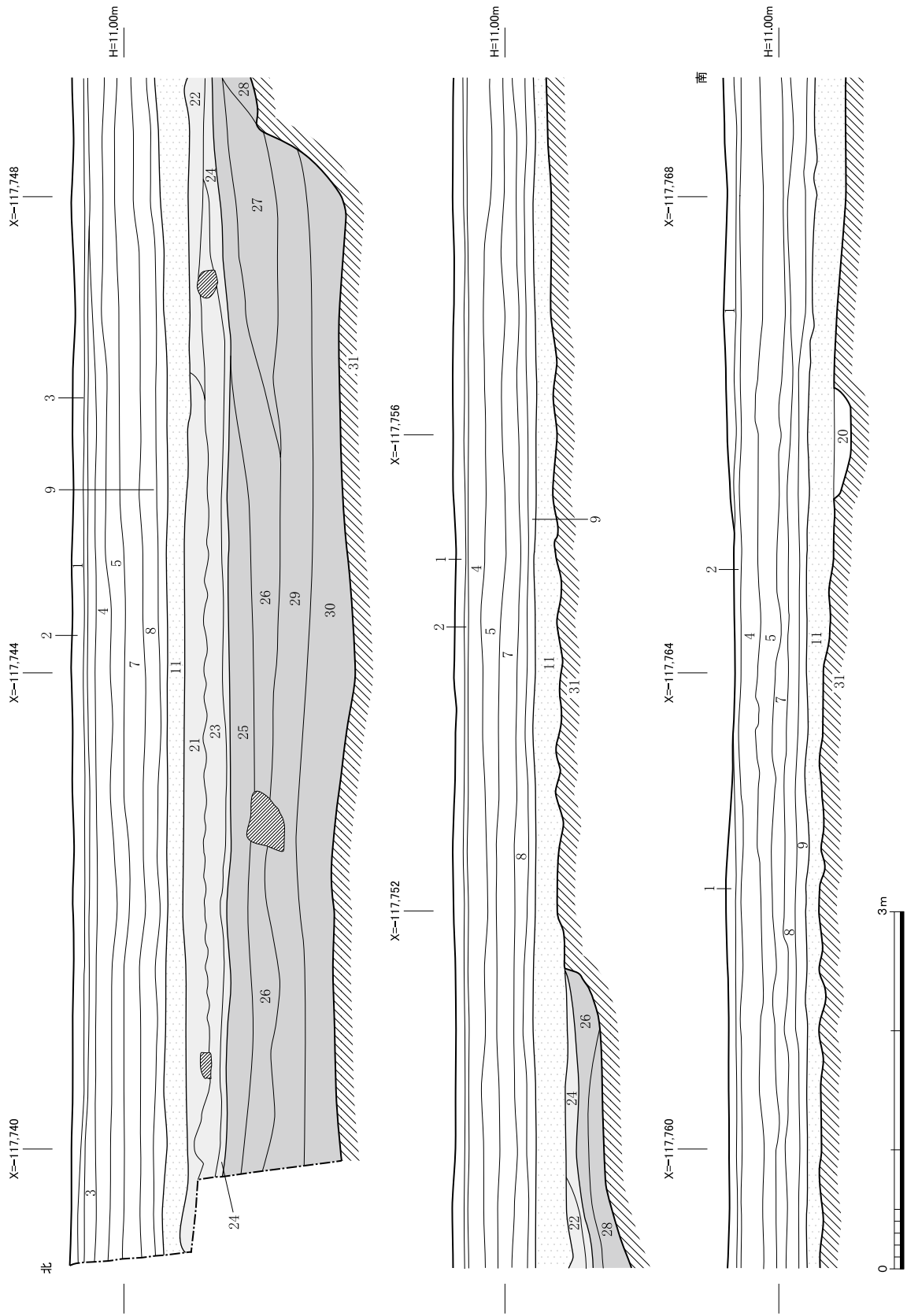


弥生時代遺構平面図（1：300）



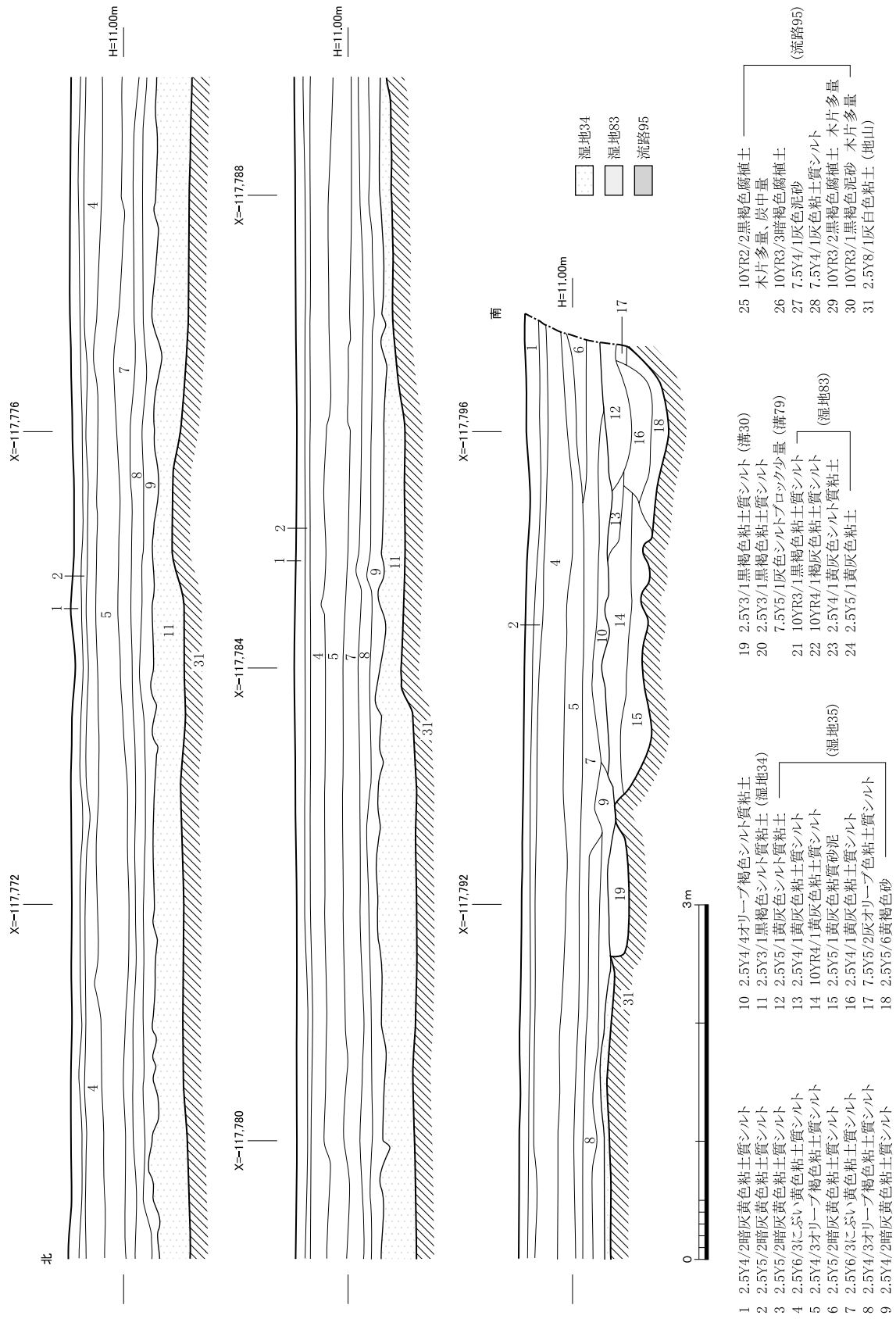
縄文時代遺構平面図（1：300）

図版 4
遺構

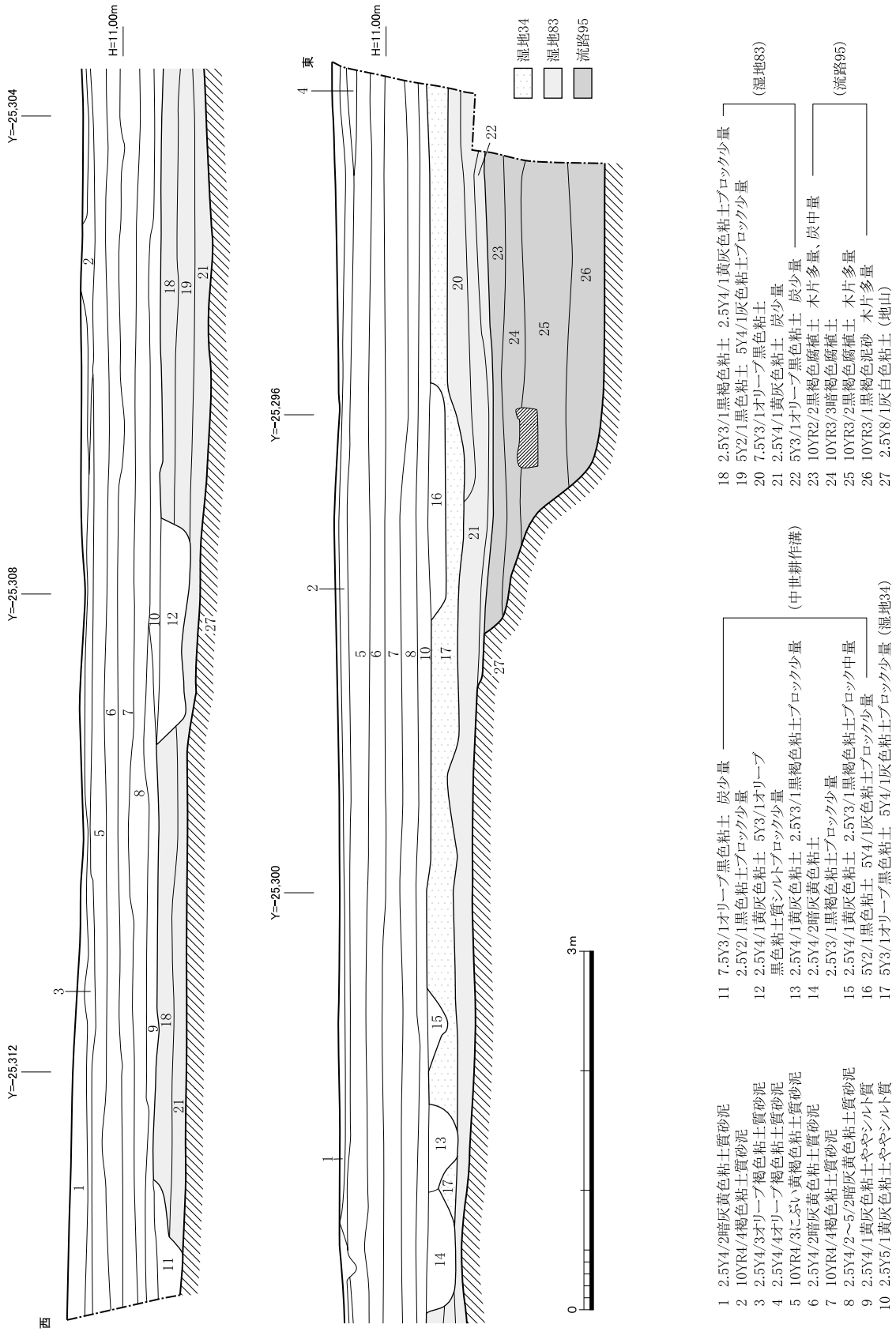


調査区東壁断面図1 (1:50)

調査区東壁断面図2 (1 : 50)



図版6 遺構



調査区北壁断面図 (1 : 50)



1 1区長岡京期全景（北から）



2 2区長岡京期全景（北から）



1 建物1 (北から)



2 建物1 柱穴22 (東から)



3 建物1 柱穴23 (東から)



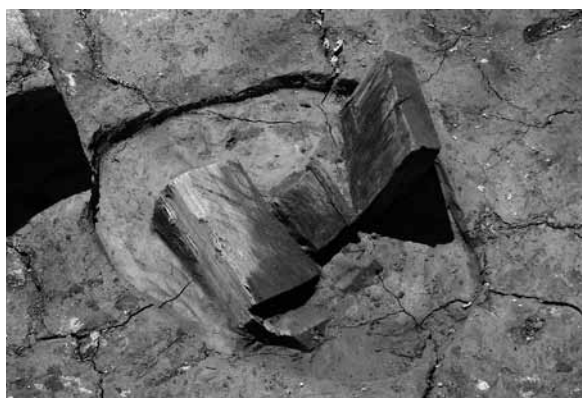
4 建物1 柱穴24 (東から)



5 建物1 柱穴72 (東から)



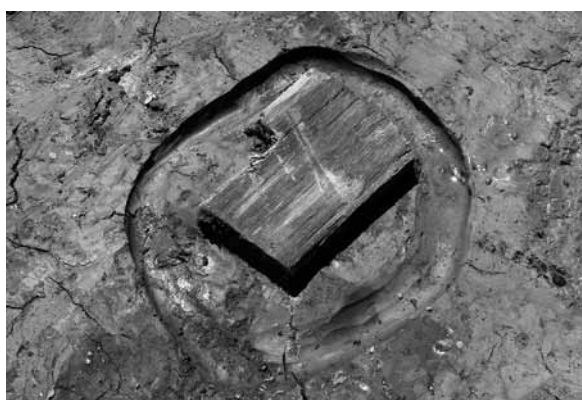
1 建物2柱穴76（北西から）



2 建物2柱穴81（北東から）



3 建物2柱穴85（東から）



4 建物2柱穴89（北東から）



5 井戸16（北東から）



1 1区弥生時代全景（北から）



2 2区湿地83・流路95（西から）



報 告 書 抄 録

ふりがな	なごおかきょうさきょうさんじょうしぼうろくちょうあと							
書名	長岡京左京三条四坊六町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2018-4							
編著者名	小檜山一良							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2018年12月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なごおかきょうあと 長岡京跡	きょうとしふしみく 京都市伏見区 こがにしでちょう 久我西出町 8番地18ほか	26100	3	34度 56分 17秒	135度 43分 23秒	2018年6月 4日～2018 年8月10日	1,223m ²	工場建設 計画
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
長岡京跡	都城跡	縄文時代	流路	縄文土器		長岡京期の建物2棟と大型の井戸を検出した。		
		弥生時代	湿地、溝	弥生土器				
		長岡京期	掘立柱建物、柱列、井戸、溝	土師器、須恵器、緑釉陶器、黒色土器、瓦、木製品、金属製品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2018-4

長岡京左京三条四坊六町跡

発行日 2018年12月28日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961